
夜蛇神伝説

津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜蛇神伝説

【Nコード】

N2462B

【作者名】

津那

【あらすじ】

崇り神『夜蛇神』を祀っていた村が過疎により崩壊した。『夜蛇神』が復活し、人狩を始めた。人間社会の中で心を病み続け、外れていった異端児が、夜蛇神に選ばれて狩人となる。夜蛇神から人類を救おうと立ち上がった科学者は、良識の壁に突き当たる・・・

第一話 竹の宿（前書き）

官能を含むホラーです。

残酷なシーン、官能シーン在り。ご注意ください。

第一話 竹の宿

幾つもの山に登って来た東山にとって、四国山脈は国内最後の山脈となる。東山は、敢えて四国を残していたのだ。四国山脈は遍路の道でもある。定年を迎えた後で、妻とゆつくり廻るつもりであった。

同期入社の後、社内の派閥が異なり出世街道まっしぐらだった岡崎と違い、二流大出の気安さからか、東山は仕事ではコツコツと無難に刺激も出世もないが、穏やかに時を重ねた。仕事より、家庭での父であり、息子であり夫であり、妻と母の不仲や、父の介護などの煩わしさより、仲間と山に登る爽快さだけを生き甲斐にしていた。厳格な山ほど燃える。

父が逝き、母が床に伏してから、妻は母にも優しくなった。二人の息子にも嫁が来て、家を出て行った。留守がちな東山の居場所は薄く、かつて6人の葛藤を囲んでいた家がひどく広く感じていた。

岡崎が、常務の椅子から転がり落ちた。岡崎の派閥の頂点は副社長で、彼が勢力を増した別の派閥からの突き上げを喰らい失脚したのだ。旗頭を失った派閥でも、岡崎は副社長の腰巾着として常に出世を重ねていたから、常務まで登りつめた。東山にとって、雲上の人となりながら、何故か岡崎は東山だけとは陰で付き合っていた。

岡崎が、出向に出された下請け会社は、四国土佐に本社を持つ中小企業だった。出向とはいえ、クビにならなかったのがマシな程度で、岡崎の有能さ故の一時的な処分だと、東山は見ていた。

岡崎は、いつしか四国霊峰や海の美しさに惹かれるようになり、登山を始めているという。

岡崎は、登山好きな東山を、四国四万十川源流に誘った。

妻とゆつくり廻るといふ密かな夢は、母に似て、愚痴と辛辣な嫌味を言うようになった妻を前にして、薄れた。

まあいい。

東山は岡崎の招きに応じ、四国行きを決めた。

登山道が完備され、標高600m程の山は、日帰りの観光的な要素も含んでいる。ちよつと登るのに適した山だった。上の展望台からの景色が抜群であり、登山者の中には若い女性もいるという。

岡崎の家に泊った翌朝、二人で軽装で出発した。

東山には、写真の趣味があり、HPでも公開し、なかなかの反響を見せていた。カメラには凝っていたし、撮影の腕も素人にしては自己満足の域であった。

快晴。風も優しく、登山日和であり、いい写真が取れそうだった。週末でもあり、登山道には多くの人が楽しそうに談笑しながら、景色を楽しみ、登って行く。

東山と岡崎も、その波に乗って、話しながら登る。話題は、昨夜同様、どうしても会社のことになる。岡崎は社内の裏情報を知り過ぎ、東山は知らな過ぎて、というか関心が薄過ぎたため、岡崎の話しに興味をそそられていたのだ。岡崎は、旧友であり社内の事情にも通じている東山に、副社長を失脚させた派閥への恨みも込めて、心のうちを吐き出した。山の澄んだ空気と話し声を吸収してくれる木々。聞かれてまずい相手はいないのだ。東山は絶好の聞き手だった。本社にいて、課長の身分だから、社内人事にも通じている。副社長失脚後、放り出された岡崎は、その後の人事を全く知らない。東山は岡崎に聞かれるままに喋った。

あつという間に頂上につき、後は下るだけだ。

東山にとってこの山は丘のようなものだろうし、余力を持余している。東山は多くを望む男ではないし、今日は散歩のつもりでいる。ただ、岡崎は、心の底に澱のように溜まった毒を吐き出し始めたら止まらなくなり、明日、東京へ帰る東山に、もっと聞いて欲しくなった。

頂上から降りながら、東山はカメラを周囲の景色や緑に向けている。岡崎は、2組の右折者と辻になっている登山道の右向きの矢印

を見ていた。下る予定では左折。右は隣の山の名が書かれていた。

「東山、こんな山じゃ、物足らないだろう？」

「いや、景色もいいし、僕は満足してるよ。」

「そうか・・・俺は、もう少し、挑戦してみたいんだが・・・今日は、お前がいるから、そんな気分になっただが・・・。」

「ふむ・・・岡崎、山に目覚めたみたいだな。ははは。右折は3kmのコースか。」

「車は、いつでも取りに行けるよ。向こうに降りたら、バスがある。」

「そうか・・・僕もせっかく四国に来たんだしね。行こうか。」

頂上で昼食の弁当を食べたとはいえ、時刻はまだ昼前。天気は良く、空気は澄み、登山道は整備されている。

2人は、右折し、歩き始めた。

脇道もなく、登山道を歩いていたはずが、いつの間にか他の登山者が見えず、続いていた道は獣道になっていた。引き返し、整備された登山道を探すうちに、二人は山中を迷い歩いていた。最早、獣道もなく、日は沈みかけ、鳥の囀りも聴こえなくなりつつある。

簡単な登山の予定だったから、地図もない。

東山は比較的大きな木を背にして座り、撮り続けていたデジカメの写真を見ていた。これで、道を探せるかも知れないと思ったのだ。写真から、目印になりそうな木などを探すが、木は見る方向が変わるだけで、同じ種類の木々の中では見分けなどつかない。

このまま、歩き回るのも無駄だし、携帯の電波は届かない。

こんなときでも、岡崎の、会社に対する憤懣は止まらずに喋り続けていた。東山は、岡崎の話しより、現状を脱する方法を考えていた。岡崎は山を知らな過ぎる。登山道を外れてしまつて夜になつたら、動かずにテントを張らねばならないが、東山と岡崎のリュックには、空の弁当箱と尽きかけた水筒、菓子の残渣しかない。

初秋とはいえ、山の空気は夜には冷える。長袖長ズボンとはいえ、

薄い衣類では備えのウチには入らないだろう。東山は途方に暮れた。登山道は整備された道は1本なのだ。登山仲間がいれば、写真のために少し脇にも逸れることはあるが、今日は、岡崎の話しに夢中になり、写真もあまり撮らなかつたし、脇道などには決して入らなかつた。

なのに、何故だ？

東山は、喉の渴きを訴え、僅かな水筒の茶を飲み干した後、ようやく不安そうな顔をしている岡崎を見ていた。

「水も、ないのかな？」

東山は頷いた。ずっと喋り続けていた岡崎は喉が渴いているだろう。だが、ないものはないのだ。我慢するしかない。翌朝、日が昇ってから山を降りればなんとかなるだろう。

あつという間に日は沈み、山は闇に包まれていく。

登山を続けていた東山にとって、こんな夜は初めてだった。

岡崎は、喉の渴きに耐え難くなって来たらしい。動かないでいよと言った東山に、喉の渴きと、下着を身につけていないためにじっとしていると寒いと訴えた。

歩き回るのは危険だと、承知しながら、東山は月明かりを頼りにゆっくりと山を下り始めた。岡崎は東山の後からついて来る。東山が足場を慎重に選んで歩いているのに、岡崎は会社の憤懣をまた、話し始めた。岡崎は東山が通った後を歩きながら、会社のことを話し続ける。東山は、黙って聞き流していた。ここで、岡崎に恐怖心を与えたら、パニックになってしまうだろう。安心して東山に頼っている方が、東山はやりやすいと思って我慢していた。

東山の耳に、微かな水音が聴こえた。

「ちよつと、黙ってくれないか？岡崎。水の音が聴こえたから。」
「何っ？水？ああ、助かつた。」

岡崎は、黙って東山の後をついて来た。東山は慎重に水音の方向へ足を進めた。水音はだんだん大きくなり、瀬があることを示している。

東山は、音を頼りに歩いていると、小さい灯を見つけた。目を凝らして近づく。清流の脇に浮かぶ灯、3つ・5つ・・・灯は、人工的建築物をかたどっているように見えた。岡崎にも見えたらしく、二人は灯の方へ進んだ。

水音が大きくなり、周囲を竹林に囲まれたその建物の屋根が見えた。

竹林から1本の車が通れるほどの道が出ているが、道の先は暗闇である。竹林の奥に、灯がいくつも見えた。大きい建物のような、灯に釣られて建物に近づく。

豪華の純和風旅館の佇まい。山荘四奏館と看板が架かっていた。引き戸の玄関の脇にインターホンがある。岡崎は、ボタンを押した。手入れが行き届いた旅館は、経営しているのがわかる。

しばらくして、玄関にぽうつと灯が灯った。眩しい電気の光だった。岡崎は嬉しそうな顔をして東山の顔を見た。ガリりと、引き戸が開き、淡い色のブラウスとスカートの若い艶やかな女が、居た。「こんばんは。道に迷ってしまったのですが、宿をお借りできますか？」

岡崎が言う。女は、驚くほどに美しい。

「それはお困りですね。どうぞ。古い山荘ではございますが、おもてなしをさせていただきます。」

鈴の転がるような声で、女はしなやかにお辞儀をして、二人を招き入れた。年代を感じさせる見事な造り、磨き上げられた豪華な内装、明るい室内に圧倒されながら、玄関を入った。

「いらつしゃいませ。あたくしが、女将の志乃でございます。このような格好で相すみません。」

志乃が三つ指について、丁寧に迎えた。岡崎の腹がぐうと啼いた。

「お客様、お夕食の方は、いかがなさいますか？」

岡崎は照れ笑いをしながら、東山の顔を見る。

「急に来たのに、大丈夫ですか？」

「有り合せでございましたら、ご用意出来ます。」

「そう。それなら、頼もうかな。」

「畏まりました。」

「・・・お部屋の方に、ご案内致します。」

いつの間に控えていたのか、仲居が背後から声をかけた。仲居の和装をしているが、なかなかの美人で、物腰も柔らかい女が、愛想良く微笑んで、二人の靴を仕舞い、部屋へと案内した。

「今夜は、急なキャンセルが2名ございまして、お部屋は空いておりました。どうぞ。お一人ずつ、ごゆるりとお使いくださいませ。お食事は、お部屋の方にお持ち致します。」

仲居が示した部屋に、東山も岡崎も入った。

広い座敷の奥に、板間があり応接セットが置かれている。板間の続きに湯殿があり岩風呂になっている。岩風呂の脱衣場の向こうに厠、板間と直角の位置、座敷の隣に大きなベッドが設えられた寝室があつた。それが1つの部屋となっているのだ。東山は、財布の中身を心配していた。部屋の造りも調度も極上。岩風呂は天然温泉。窓から見えるのはこの部屋専用の庭のようなものだ。隣室とは竹で仕切られている。壁はなく庭の奥は見事な竹林。

東山は、流し湯の音に誘われて、湯殿に立った。

とろりとした泉質は少しぬるめで、東山は肩まで浸かるとむうと溜息に声が混じった。全身の毛穴がじわりと開くのを感じる。

今日は泊らねばなるまい。いくらかかるか想像もできないが、楽しむとするか・・・。

岡崎と離れて、一人で過ごせるのも、いい。

東山はゆっくりと湯を楽しみ、丹念に体を洗ったあと、もう一度湯船に使った。一人には広い岩風呂に、東山は体を伸ばした。

用意されている浴衣に着替えて、座敷に戻ると、先程の仲居が、座卓に膳を並べているところだった。急座にしては見事な膳に、東山は急に空腹を覚えた。

「うまそうだなあ。いい湯でしたし、こんな山の中に、素晴らしい

旅館があつたんですね。」

「お湯は、少しぬるめですが神経痛や関節痛などにもよく効きますし、何より若返りの効果がございますので、東京など遠方のお客様さまが口コミでいらつしやるのですよ。」

「ほほ。」

東山が頷き、料理に目を落としたので、仲居は愛想良く料理の説明をした。東山は箸を持ち、料理を突っ突きはじめた。旨い。東山は、飢えていたようにガツガツと箸を進める。

しばらくして、飢えのようなものが治まる頃、膳は半分以上綺麗に平らげていた。こんなに食べたのは、本当に久し振りだった。仲居の言っていた若返りの湯の効果かな、と、一人で笑んでいた。

「こんばんは。お邪魔致します。」

声がして、すつと座敷の襖が開いた。しつとりとした和装の志乃が顔を見せ、

「今夜はようこそいらつしやいました。」

三つ指について挨拶をした。

「やあ、これは女将。今夜は急に泊めてもらったのに、すっかり寛がせてもらっています。」

「それは、ようございました。」

志乃は、長い黒髪を少し傾げるような仕草で、微笑んだ。
美しい。こんな美しい女が居たのか。

東山の目は、志乃に釘付けになっていた。

「お酌をさせていただいても、よろしいですか？」

志乃が柔らかい声で、聞いた。

「もちろん。かまわないが・・・」

他の客はいいのか？と聞こうとして、止めた。志乃が東山の傍にぺたりと寄り添うように座り、しなを作って、東山の手を杯を握らせた。志乃の甘く香る髪と白粉の匂いがある。スラリと伸びた腕は白く柔らかくぬくい。東山は杯を握った。志乃がとりとした酒を注ぐ。

くいつと呑むと、酒が喉にカツと流れた。

「この山荘は、妹と遣り繰りしているのです、お部屋は2つしかございません。岡崎様のお部屋には、妹の玉枝が付けていただいております。東山様には、この志乃がつかせていただきとうございます。・・・お嫌でなければ。」

志乃は、東山を下から艶やかな目で見上げた。

「僕は、かまわない。・・・女将も、呑んで・・・。」

「嬉しい・・・志乃と、呼んでくださいまし。」

東山は志乃に酒を注ぐ。志乃の柔らかい肩が東山の胸に寄り添っている。右腕を伸ばせば、志乃を抱きしめることができる。東山はゴクリと唾を飲み込んだ。

女に手が早い岡崎は、妻の他に愛人を持つことのできる男だった。相手の女は社員であり、取引先であり、行きずりであり、岡崎は女と器用に遊んだ。東山は、願望はあるくせに、何度か金で買ったが、素人の愛人など持ったことはない。ネットで知り合った人妻は、売春目的の素人だった。愛人というものには無縁だった。やはり、東山は岡崎とは違う。

岡崎ならば、躊躇せずに、志乃の妹、玉枝を楽しんでいるのかも知れない。今、東山の胸の内側にいる志乃は、東山が見たこともないような美しさを持ち、項は陶器のように白く滑やかで、この山荘は、高貴なその遊びの宿のようだ。

東山は、志乃と酒を注しつ注されつするうちに、志乃の肩に手を回し、志乃の美しい顔に見惚れ、頬摺りをした。志乃は艶やかな素振りと目で東山を見つめる。

「明日は、東京にお帰りになるのでしょうか？」

「うん・・・。」

「奥様のところに？」

東山は、急に苦々しくなり、

「妻とは、うまくいっていない。」

と、ぶつきらばうに答えた。志乃は、東山の顔を見上げ、

「では・・・今宵だけは、志乃をあなたの妻にしてください・・・」
東山は、志乃の唇を吸った。甘い幸福感が全身を駆け巡る。

女を忘れるには早過ぎる。東山はもどかしさに目を閉じながら、心の内で焦っていた。買える女との行為の後は、虚しさで自己嫌悪だけが残る。素人女を口説ける勇氣は持ち合わせていなかった。

志乃は娼婦かも知れないが、この豪華な旅館を切り盛りできる女だ。金だけで身売る女とは違う。それに、東山の脳を蕩かすようなこの思いは、青年の頃の初恋に似て、トキメキを伴うのだ。

狂おしいほどの情熱が身の内に湧き、東山は志乃を抱きしめた。唇を吸い、舌をすると志乃は応えた。

「この山は、昔、人に恐れられていた山なのです。霊峰とはそのため。人の生血を啜る鬼を沈める鎮守の山でございます。」

志乃は、柔らかい声で言う。東山は志乃の胸に手を入れ、形良く掌から零れる乳房を撫でていた。

「だから、僕は道に迷ったのかな？」

「いいえ。これは昔の話。この辺に昔住んでいた人の中の伝説です。」

「ここは、民家の近くなの？」

「残念ながら、それも昔です。過疎で、誰もいなくなりました。直ぐ下の里は、今では地図にも村として載っていません。」

「この宿だけが、頑張つて経営しているんだね？」

「ええ。・・・温泉のお陰で。1晩に3名様だけですけれど。」

志乃に、客に、いつもこんなことをさせているのかと、聞こうとして、東山は止めた。言葉の代わりに、東山は志乃の唇を吸った。娼婦でもよい。

一夜の妻になりたいという美しい女に、溺れてみたいと思った。

紅い絹の布団を直に見るのは初めてだった。真っ白い志乃の裸体は紅い布団の中で妖しくなる。東山は突き上げてくる精気を志乃の中に打ち込む。志乃は東山の腕の中で突き上げられるたびに揺れて、甘い吐息に歓喜の声を切なく吐いた。

志乃は淫靡な技巧に富み、東山を疲れさせずに、何度も歡喜の渦に包む女だった。志乃は尽きぬ歡喜の波に、乱れながら、東山に夢中でしがみついた。

ズキリ・・・

仰向けで志乃を下腹部に跨らせ下から突き上げていた東山の肩に、堪らず志乃が顎を乗せたとき、東山の首筋に鋭い痛みが走った。同時に、全身を歡喜が駆け巡る。

「嗚呼・・・」

志乃の唇が東山の首から離れ、跨ったまま上体を起こしながら喘いだ。東山は全身を駆け巡る歡喜の中で、薄く目を開けた。

志乃の唇は血で汚れ、東山をキラと光る目で見下ろして、笑った。
「や、やめろおおっ・・・」

東山の下腹部から、全身を駆け巡る歡喜に乗り、波のように志乃に向けて何かがが流れていく。志乃は喘ぎながら、笑い、腰をしなやかに揺らす。

「し、志乃・・・お前は・・・。」

東山は、呼吸も苦しくなり、猛烈な勢いで精気のようなものが吸い取られて行くのを感じて、目を見開いた。

志乃が腰をぺたりと東山につけたまま、耳元に唇を寄せた。

「旦那様・・・言っただけじゃありませんか。鎮守の山なのでございますよ。」

「・・・お、鬼か？・・・何故？」

「だって・・・うふふ。神社も過疎で、だあれも居なくなりましたもの。・・・やっと、あたくしたち、また、狩ができますのよ。」

「狩だと・・・？」

「はああ旨い・・・旨いい・・・嗚呼・・・」

東山は薄れ行く意識の中で、しなやかに腰をビクビクと小刻みに波打たせ、歡喜に叫ぶ志乃の声を遠くに聞いている。

第一話 竹の宿（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

次は、人間界の異端者が、四奏館にやって来ます。
引き続き、津那の嘶を、読んでください。

第二話 廃人の末 1

山荘と呼ぶには華やか過ぎる。

過疎となり幾年も過ぎた村をゆつくり通り過ぎた後、両脇にブナの森が迫りかつて舗装されていた道が落葉と灌木の伸ばした枝で狭くなっている筋を進む。駅まで迎えに来てくれたワゴン車の車体に枝が当たってゴツゴツとした音がする。雑木の森の中に、手入れの行き届いた見事な竹林が見えた。ワゴン車は竹の葉が敷き詰められた空間に静かに停車した。

「さ、どうぞ。」

草臥れた背広、何年も座り続けて擦た尻部を覗かせて、早田は中腰で岩本を振り向いた。銀縁眼鏡の奥で愛想笑いをしている。岩本は、早田の後に続いてワゴン車を降りた。

竹林を竹垣で切り取ったような石畳の道を歩く。竹林を風が渡りさわと竹葉を揺らす。澄み切った空気と贅沢な静寂を感じながら、岩本は早田の後を黙々と歩きながら、やはり俯いていた。

竹林の奥には、竹林に溶け込むような和荘が姿を見せた。

山荘と呼ぶには華やか過ぎる。

年代を感じさせながら、丁寧な手入れが続いている荘厳たる構え。分厚い藁葺き屋根、板壁、木枠ガラスの引き戸は重かった。打ち水を撒いた石床に立つと、三つ指を突いていた女将が

「いらっしやいませ。ようこそ、岩本様、早田様、お待ちしております。」

と、しつとりした声で言いながら顔を上げた。俯いていた岩本は、ふと女将の顔を見て唸った。

庸子さん：

密かに想い続けた人妻の顔がそこにあった。よく見れば、庸子ではないことがすぐにわかった。似ている。岩本は、また俯いた。

女将は挨拶をしただけで、すぐに女中に変わって、岩本が見ると

早田の背の先に、小柄な女の和装の背が見えた。二人の荷物を持って足音を立てずに優雅に歩いている。藍染の織模様の品のある着物は、素人の岩本が見ても山荘と呼ばれる旅館の仲居が仕事着にするには華やか過ぎる。磨き上げられた古く黒く日に照らされると茜色にも見える床板を歩く我の化繊の靴下の垢染みが醜く惨めになる。「見事な庭ですな。」

早田の特徴のない声に、岩本は猫背の背のまま俯いていた顔を庭に向けた。木枠に嵌められた透明硝子が続く右手には、竹藪の景観に溶け込むような石庭がある。岩本はまた俯いた。

「こちらの藤の間が、岩本様のお部屋でございます。」

仲居に案内された部屋は、畳敷きの座敷に、洋間の応接セット、その奥に部屋付きの岩風呂、板間の脱衣場を経て畳の寝室となっている。贅を尽くした部屋の造りと調度の見事さに呆然としていた岩本の耳に、

「早田様は、こちらでございます。」

と、仲居が案内して去っていく声が聞こえた。岩本は、早田と違う部屋だということに、意外な気がしたが、宿を手配したのは早田だったから、早田がそれを希望しているのだろうと納得して、湯気を立てている岩風呂をチラと見て脱衣場に立った。とりりとした泉質に全身の毛穴が広がり、「うむ」と声を漏らした。

岩の隙間からとろとろと湯が湯船に流れ落ちている。少し温めの湯に、ジワリと芯まで寛ぎながら、岩本は目を閉じた。

何もかもを失っていた岩本すぎるが、数え切れぬほどの自殺未遂を繰り返した拳句、また、同じ、麻宮病院の6人部屋に横たわっていた。また、大量の睡眠薬を飲んで、眠りにつきながら、ふと覚醒した。恐ろしくなって、救急車を自分で呼び、麻宮病院に運ばれた。救急隊員も同じ家から同じ人間を同じ理由“自殺未遂”で運ぶので、同じ病院に連絡をとり、受ける病院も同じ。

患者の間にも、自殺未遂常習者の岩本すぎるのことは知れ渡って

いた。

胃の洗浄だけで、岩本の処置は終わった。市販の睡眠薬の多飲では死に至らないことを十分この病院で知らされていたにも関わらず、同じ過ちを繰り返してしまった。岩本は病院の自宅より清潔なベッドに横たわり、6人部屋の人の気配を煩わしく思っていた。昨夜遅くに処置をされてそのまま病室で朝を迎えていたのだ。

「おはようございます。」

「おはようございます。ぐっすり眠れましたか？」

「庸子先生、今朝、ちよつと腹の調子が悪くって・・・後で診察してもらえますか？」

「わかりました。あとでお部屋に伺いますね。」

「待ってますよ。庸子先生。」

岩本は、開け放たれたドアの向こうから聞こえる会話に聞き耳を立てていた。6人部屋の廊下側のベッドに横たわりながら、庸子先生の声が聞こえた瞬間から、部屋が急に静かになり、そわそわとベッド周囲の雑多をしまいこんでいる同室の男たちの行動に気付いていた。――多分、庸子は、俺の部屋に来る。――岩本は、自信に満ちた気分で、目を閉じた。

「岩本さん、おはようございます。具合はどうですか？」

岩本は、ゆっくり目を開けた。

朝日の中の、ベッドの境に渡しているクリーム色のカーテンから差し込むゆるい光を浴びて、岩本の主治医、梅塚庸子が、岩本のベッドへ近付いて来た。弱弱しそうに庸子を見上げると、庸子は岩本の顔を可愛らしい顔で覗き込んだ。

「顔色はいいし、少し栄養失調というところかしらね。ちゃんとお食事していなかったでしょ？」

岩本は頷く。

「昨夜、胃の洗浄の処置をしています。薬剤は消化されていなかった。腸の方は洗浄していません。…どうして、通院の時に言ってくれなかったの？」

精神科医の庸子のもとに、岩本は2週に1度の割合で通っていた。庸子の顔を見たくて、声が聞きたくて、岩本は通院の日が近付くとそわそわして何も手につかなくなるのだ。長い待ち時間の後、庸子に診察室で会うと、何も言えなくなってしまうのだ。

自殺を試みてしまった岩本に、庸子が少し悲しそうな目をしてくれている。岩本は、それだけで胸がいっぱいになるのだ。目が覚めて庸子の顔が傍にあり、自分を見詰めている。それだけで、僅かな幸せを満喫できる。

「庸子先生に会いたかったんじゃないのかい？」

容赦のない忍び笑いが、同じ病室から沸く。岩本は自分と庸子の二人っきりの空間を覗き見されたような、穢されたように、苛々が顔に出る。庸子は、岩本の変化を見逃さなかった。

「後で、ゆっくりお話ししましょうか？」

夢のような庸子からの申し出に、岩本はかすれた声で頷く。

「はい。」

「午後に、呼びますから、診察室へ来てください。」

「はい。」

「退院の、準備をされていていいですよ。」

「えっ？」

庸子は、にっこりと微笑む。

「…痛っ…」

顔を顰めて胃部を押えて、岩本はくの字に体を曲げた。庸子が心配そうに見えていると思うと、岩本は自然に汗が噴出し、痛みにもがきながら、本当に苦しくなってきた。

「消化器科の受診を午前中にされた方がいいですね。」

庸子は、岩本の背にそつと華奢な手を添えると、優しい声で言い、カーテンから出て行った。庸子が部屋から出ると、同室から、非難の溜息が聞こえた。

「あーあ、庸子先生に見てもらえると思ったのになあっ。」
若い声が叫ぶように言う。

岩本は、くの字に体を曲げたまま、目を瞑って転がっていた。しばらくして、看護師が来て、岩本に「診察ですよ」と、声をかけて車椅子に岩本を乗せた。くの字に体を曲げたままの岩本を、待合室の裏側を通って、診察室へ連れて行った。

見慣れた診察室だが、庸子の部屋ではない。岩本は、ぎよろぎよると目を動かして、様子が違う部屋を注意深く見ていた。岩本が入ったドアとは別のドアから、3人の医師が入って来た。1人は庸子だった。2人は男の医師で、1人が岩本に笑顔を向けていた。

「岩本さん、こちらは今里先生です。勉強熱心で、素晴らしい功績を沢山出されて、岩本さんが頼りにするには心強い先生です。」

庸子の柔らかな声が、岩本に残酷な紹介をした。今里は、席を岩本にすすめ、自分も腰を下ろした。

「岩本さん、あなたのことは梅塚先生からよく聞きました。今後は、私があなたの主治医になります。ゆつくり、お話を聞いていきましょう。こちらは、消化器科の坪井先生です。胃の調子が朝にぶり返したようですが、今、まだ苦しいですか？」

岩本は、黙って俯いた。

「岩本さん、口を開けて診せてくれますか？」

坪井が、岩本の横に座って言う。岩本は石のようにぴくりとも動かなかった。唇を嚙締める。

「うん。やはり精神的なものですね。」

今里が合図を送ると、坪井と庸子は連れ立って出て行ってしまった。岩本は庸子の後姿をじっと見送った。

「…梅塚先生のが好き？」

今里の声に、岩本は動揺を隠せなかった。

「わかるよ。彼女は魅力的ですからね。患者さんにも大人気ですね。」

今里の真面目な声に、岩本は、今里の顔をじっと見た。

「梅塚先生のことをそんな風に思っているなら、心は健康なんですよ。ちよつと落ち込みやすい状態ですけどね。…恋は、何も恥ずか

しがることはありませんよ。…ただね、恋してる相手が主治医だと、なかなか言えないことってあるでしょう？あなたは不本意な顔をされたが、やはり、主治医は交代した方がいいと思いますよ。私は、あなたが梅塚先生に恋していることを非難しません。」

「俺は、別に、梅塚先生のことは、何とも思ってます。それに、あつちにはその気ないし。噂だけど、結婚して、子供もいるって聞いているから。そんな人に、俺は、何も思ってます。」

「これは、失礼しました。私は同じ男として、勘違いしてしまいました。私が、彼女を素敵だなあと思って思っていますのでね。」

「えっ？…先生は、結婚されてるんでしょう？」

「ええ。していますよ。」

「じゃあ、何で、何で梅塚先生のことを、庸子さんのことを、素敵だとか、言えるんです？」

ムキになる岩本を、今里はじつと見ていた。

「俺は、結婚しているくせに、庸子さんのこと、好きだとか、かわいいとか言ってる連中が許せない。俺が、ここに入院して来るのを、庸子さんに会いたいからだとか言う連中がいるが、俺は、そんなじゃない。あの人は医者で、俺のことなんか何とも思っちゃいないんだ。あの人には旦那も子供もいるんだ。俺は、そんなじゃない。」

「岩本は、憤慨を今里にぶつけながら、立ち上がり、拳を振り回していた。」

「こ、殺してやる。この善人面した卑劣男め・・・」

「ぐう・・・」

岩本の獣のような濁った目をじつと見ながら、今里は厳しい目のまま、穏やかな声でさらりと言う。

「あなたの誠意は、梅塚先生にお伝えしておきましょう。」

「何で、伝えるんです？あの人は、俺を捨てて、あんたに任せてるんだろう？俺が嫌いになったんだろう？だから、あんたに代わったんだ。」

岩本は、ガクツと肩を落とした。

「じゃあ、伝えてください。…俺は、死にます。」

「2・3日、入院しましょうか？夕方、カウンセリングを受けに来てください。」

「いいですよ、俺は、死にますから。」

「死ぬって言うている患者に医師ができることは、残念ながらいくつも選択肢がないんですよ。」

今里は優しい顔で言いながら、電話のボタンを押した。すぐに、男の看護師が2人、診察室に入ってきて来て、有無をいわせずに岩本を連れ出した。スタッフの通り道のようなところを歩かされて、2重扉の建物に入った。狭い個室に通された。小さい明り取り窓には格子があり、白い壁にパネル式のTVが壁に埋まっている。ベッドのところで拘束を解かれて、注射を打たれた。

パネル式のテレビが癒し映像を延々と映し出して時間の経過がわからなくなっていた。

ぼんやりとした頭が、だんだんと冴え、人寂しくなった頃、岩本は庸子のことをいつものように考えていた。死ぬと言ったことも、主治医が今里に代わったこともすべて忘れていた。今里が現れた。

「気分は、いかがですか？」

「誰だ？こいつは？」

「こんにちは。私は、あなたの主治医の今里です。」

「主治医？・・・あの人は？」

「あの人は？・・・お忘れですか？私が、ずっとあなたの主治医でしたよ。」

「そうだったのか・・・」

岩本は見知らぬ医師を、ぼんやりと眺めた。

いくつか他愛ない会話をした後で、岩本は4人部屋に移された。

大人しく穏やかな患者たちは、ピタリとカーテンを閉めたまま、

個の世界に浸っているようで、岩本も静かに寝転がった。

幾日か、誰と会ったのかわからないうちに経ち、退院を翌日に控えた晩、岩本は言いようのない寂しさに襲われた。独りで狭いアパートに帰り、することもなく、多くの人のざわめきの中での孤独。話しかけて来るのは買物に言った先の売り手だけ。言葉に乗って相手の薦める商品を買えば一瞬にしてその関係は終わる。いろいろな質問事項を考え付くままに話しかけると応じてくれるものの、他の接客の邪魔だと言わんばかりに邪険にされるのだ。近所の顔見知りも、挨拶をするだけで終わり。挨拶以上に話しかければ、相手は途端に怪訝な顔に変わり、次に岩本の顔を見ると、逃げるように顔を背ける。放映つ放しのTVは独り言を延々と続ける。そんな家に帰りたくなかった。病院にいれば、誰かがいる。暇な患者もいる。岩本は、ベッドに転がったまま、膝を抱えて丸くなり、目を閉じた。

庸子・・・

「岩本さん、岩本さん・・・」

自分と呼ぶ声に、岩本は目を開け、耳を澄ませた。消灯時間を過ぎ、寝息が聞こえる中に、かすかな声で呼ぶ声がする。岩本は素足で床に降り立ち、カーテンをそっと開けてみた。

「こんばんは。」

同室の早田が、灰色の品のあるパジャマを着て、同柄のスリッパを履いて、銀縁眼鏡の奥から優しそうな笑顔を向けた。早田とは少ししか話していないはずだが、と、怪訝な顔をした。

「夜分にすみません。」

早田は声を落として言うと、

「ちよつと、散歩しませんか？」

「散歩？」

「屋上にね、行ってみませんか？私も、明日、退院でしてね。ちよつと寂しくなったものですから、付き合ってくださいよ。」

岩本はジャンパーを着込み、素足のまま履き古したスニーカーを

履いて早田に並んで歩いた。誰かに誘われると、怪訝に思いながらも従ってしまう。そうやって、誰かが馬鹿だと言えば馬鹿だと思っし、生きてるのか死んでるのかわからないと言われれば、そうかと思つて死のうとしてしまう。

こいつは、誰だ？俺は、どこに行く？

早田の背を見ながら、岩本はペタペタと歩く。

ナースステーションの横をこそそと通り過ぎるときに、不思議と見咎められなかった。何故か、それに腹が立つ。

あまりに無防備ではないか。患者への注意力が散漫なのではないか。看護師が一人しかおらず、パソコンに集中していて、廊下をこそそと歩いた岩本たちに気付きもしなかったのは、職務怠慢ではないのか。

早田は慣れた様子で階段を上がり、屋上に続く扉を押した。岩本が初めて行つた屋上には、鉄格子がまるで巨大な檻のように張り巡らされた洗濯干し場だった。

「岩本さんも、明日、退院でしょう？」

七三に分けた髪は白髪交じりで、草臥れた生真面目なサラリーマン。声は小さく少しオドオドとしていて、出世できないタイプだろうと岩本は推察していた。

「私は、旅行が趣味でしてねえ、行き先は一つなんです、実にいいところなんです。岩本さんは、旅行は、好きですか？」

岩本は、黙っていた。

「旅行と言いましてもね、行きつけの山荘に2・3泊でもすれば、それで十分なんです。相手さえいればね、いつもそつとお連れしているんですよ。」

早田は愛想笑いのような微笑を浮かべて、岩本を振り向きながら話す。岩本は早田の斜め横顔をチラチラと見るだけで、決して目を合わせないし、相槌も打たなかった。無言で無表情のまま、背中を丸めて突っ立っていた。早田は薄ら笑いを浮かべたまま続ける。

「私、明日、退院なんです。岩本さんも、明日、退院でしょう？」

岩本は黙っていた。

「ご一緒、しませんか？その山荘。」

岩本は黙っていた。

「私の趣味ですのでね、お連れさせて下されば、交通費も宿泊費も私が負担させてもらいます。ただ、その素晴らしい山荘に、是非、あなたをご案内したくつて。それだけなんですがね、いかがでしょう？」

岩本は黙っていたが、内心大いに動揺していた。早田の顔を食い入るように見詰めている岩本に、早田は愛想笑いのような微笑を向けたまま続ける。

「生きる希望がない…失礼ですけど、そうお考えじゃありませんか？」

岩本は怪訝な顔をして早田を睨むように見た。

「その山荘の名前、四奏館と言っんです。音楽の四重奏の意味なんですがね、三味線と太鼓と笛と唄。ちよつと粹でしょう？」

岩本は黙っていた。早田はヘラヘラとした顔を岩本の目の前に見せて、一層声を落として言う。

「梅塚庸子先生…私、彼女が大好きなんですが、現実片思いですよ。それがね、彼女にそっくりな女性がいるんですよ。その山荘の女将です。」

早田は喉の奥でかみ殺したような笑い方をした。

「そっくりな人？」

岩本は唸りに似た声で聞き、もぞもぞと早田を見上げた。

片思い？…そうだ。コイツは、まともなことを言う。

「ええ。真正正銘の独身でして、過疎になってしまった山里で、両親から受け継いだ山荘を、妹さんたちとひっそりと守っているんですね。健気な話でしょう。」

「…急に、そんなことを言われても、俺は…」

「こんな話、同室の人に話せますか？お互い、明日、退院すれば他人同士なんです。だから、話せるんじゃないですか。…庸子先

生に、ひっそりと恋をしてるなんて話をね。ふふふ。」

「はあ……」

「庸子先生に似た女将の笛がまた、見事でしてねえ。…でも、私は、女将の妹御の方に、ちょっと惚れてしまってるモンですから……。似てるんですけどね、やはり、色恋は相思でないと、ねえ。」

岩本は、特徴のない早田の顔を眺めるように見ていた。理解できないが、庸子に似た女のいるところに案内しようと言っているようなのは、うつすらと理解できた。

「この世に未練のない男が、癒しに行くには、絶好の隠れ家なのです。…私は、気に入った方をお独りだけ、お連れするのが趣味なのです。私の趣味に、同調してくれるような方をね。」

「それが……。俺……ですか？」

「言っておきますけれど、そこは淫売宿では決まてないので、品位ある遊び、本当に女将が気に入って楽しんでくれる、それだけです。よ。美味しい料理といい天然の湯と、もてなしの宴、それだけです。」

早田が愛想笑いではなく、生真面目な区役所の事務員のような口調で言う。岩本は、納得した顔で頷いた。

「もちろん、そうです。俺は、下品なことなんか、庸子さんに対しても思ったことはありません。」

「そうでしょうとも。」

早田は大きく頷いて、岩本の肩を両手で掴んだ。

「そういう方だからこそ、お誘いしているんです。誘った以上、金のことはご心配しないでください。手ぶらでいいんです。浴衣も手拭も揃っていますからね、身ひとつでぶらりと行きましょう。」

「で、でも、俺……。そんな……。早田さんに悪いですよ。」

岩本は、おどおどとした顔で早田を覗き込む。

「大丈夫です。あなたが、そういう遠慮深い人だから、お誘いする価値があるんです。いいですか、この話は、内緒ですよ。私の秘密の趣味なのですから。」

「もちろんです。」

「では、出発の日は3日後、この病院の裏の公園に来てください。早朝、発ちましょう。遠いですからね。6時、早いですが、いいですか？3日後の朝6時、この病院の裏の公園ですよ。」

「わかりました。」

「くれぐれも、家族にもご内密に。」

「わかっています。」

「さ、冷えましたね。病室に戻りましょうか。」

「はい。」

早田が先に立ち、二人で並んで病室に戻ったが、早田が手洗いに立ったので、ナースステーションの前を、岩本一人で通った。

「あら、岩本さん、どこに行っていたんです？」

「お、屋上です。」

「屋上？…今度から、行くときは声かけてくださいね。」

「はい。」

岩本は病室に戻りながら、看護師に腹を立てていた。

気付かなかったのはそっちの怠慢じゃないか。

いつもならば、立腹したら些細なことでもずっと延々と気になって眠れないものだが、早田の提案のことを考えると、興奮して久しぶりにわくわくした。庸子に似た女、それも独身の女が、過疎の山里でひっそりと山荘を営んでいる…何かの予感が全身に満ちて、岩本は心地いいまどろみに落ちていった。

翌朝、心地いい目覚めの朝を迎えた。カーテン越しに、看護師が早田に体温計を渡している声が聞こえ、岩本は昨夜の早田の提案を思い出して含み笑いをしていた。

今里の診察を受けてから、病室に戻ると、早田のベッドは空になっていた。身支度の道具も、ほぼ病院からの借り物で済ませていた岩本は、介護士に戻した後で、運び込まれたときと同じ格好のまま、退院した。

二日後の朝が、待ち遠しい。

その思いは、岩本に初めての希望を与えた。

約束の前夜、岩本は時間が気になって眠れぬ夜を過ごした。

約束の場所に5時半に到着し、霜柱の降りた公園をウロウロと歩き回った。着古したジャンパーの下にセーター、木綿のズボンを着て、下着を2枚だけ持って来た。そういえば、何泊するのか聞いていなかったが、話の中で早田が2・3泊すれば気分が変わるといつていたことを思い出して、2枚の下着を持ってきていたのだ。

公園には時計がなく、岩本も時計を持っていなかったが、ひよっこりと顔を見せた早田が、「きっかり6時です。」と言って笑った。「お待ちになりましたか。」

「いえ……」

「出発、しましょうか。」

岩本は、早田の半歩後ろをのそのそとついて歩いた。早田は、草臥れた灰色のスーツを着ていた。2・3言、誰にも秘密を漏らさなかったかということと、しばらくの留守で家は大丈夫かというようなことを確かめるように聞いただけで、あとは、無言なことが多く、駅に到着すれば、切符を2人分購入して岩本に1枚を渡してくれた。普通列車で東京駅まで行き、特急に乗り換える。JRに乗るのも、遠出をするのも、旅行に行くのも、遥か昔のような気がする。

岩本は古い追憶に浸りながら、記憶の底の苦痛だらけの記憶を、慌てて封じ込めた。いつもの最悪の自己嫌悪に落ちてしまう。

いいことなど、なかったのだ。何一つ。今までは。

寂しくて切なくて、辛いのに、人と関わることを拒んでいた自分。関わってくる相手に対して猜疑心以外の気持ちが生れない。そして、やっと自分が心を許そうと思った時、相手は、無口と無愛想を尽くした岩本に対して、背を向けた。

悪循環。

わかっているが、後悔する以外に手はないのだ。次第に悪口を言われるようになっていた。何かがあれば疑われる。誰も彼もが岩本

に背を向ける。

岩本は、恐れ続けた。周囲に女が集まってヒソヒソと話していれば、自分の悪口だと思い、女が自分の方を見ていれば自分の醜さを嘲っているのだと思い、誰かが笑っていれば自分のことを笑っている、と思った。

常に苛々し、棘々しく怒っていた。自分を理解してくれる人など、いるはずがない。それが、堪らず切ない。

初めて自殺未遂をしたときに、運び込まれたのが、麻宮病院だった。自宅にあった大工道具の鑿を自分の腹に突き立てて、その痛みで混乱した。自分で刺したのに、強盗に刺されたと騒ぎ立てた。支離滅裂な供述に、警官が岩本を狂人として扱ったのだ。あのとき、唯一優しくしてくれたのが、梅塚庸子だった。

岩本は、過ぎていく列車の窓の景色を見ながら、ぼんやりと考えていた。

庸子・・・

刺した傷は極浅かった。縫合を終えた岩本に、主治医になったと庸子が言った時、岩本は全身の毛穴が総立つのを感じた。女神だと思った。言葉も眼差しも声も優しく、知的で、颯爽としていて、女優のように美しい。自己嫌悪に浸っていた岩本に、

「あなたは何も悪くない。」

そっと見詰めて言う仕草に、卒倒しそうなほどの眩暈を覚えた。「苦しかったんですね。」

優しい声に、思わず涙が溢れた。何でも受入れてもらえる、そんな気がした。この美しいひとに・・・

俺だけの女神のつもりだった庸子に、男も女も患者が群がり、庸子は誰にでも真意を込めて優しく接するのだ。

何度めかの入院の時、隣のベッドだった若い男が、庸子の名を呼びながら自慰をしているのを知った時、そいつを殴り殺そうかと思った。

俺の女神が穢される。

たまらなく嫌で、岩本が男の看護師に、そつと隣の男のことをチクツたのに、ベッドを替えられただけで、相変わらずそいつの主治医は庸子だったし、回診もそいつのところにも回っていることを知って、愕然としたものだ。

あの後で、知ったのだ。庸子に医師の夫があり、大きな子供がいるということ。夫の医師は外科医で、大学病院の偉い医者だとか。子供が有名私立の学校に通っているとか。

虫唾の走るような話を聞いたとき、それを自分の自慢話のように話している糞婆どもに殴りかかってしまった。滅多殴りにして、糞婆の一人を血だらけに成敗してやっただけなのに、岩本は拘束され、小さな明り取り窓のある狭い個室に放り込まれて、壁のパネルの癒し画像を延々と見たのだ。

2週間に1回の通院で、庸子に会えるという思いだけで、岩本は生きていたのかも知れなかった。それなのに、岩本に一度庸子は何も言わずに看護師に伝達をさせて、学会に行ってしまったていて、代わりの医師が診察したのだ。学生のような若い医師が、不貞腐れ続けた岩本に、事務的に対処しようとしたから、岩本は、その後2ヶ月ほど行かなかった。

その後で、突発的な自殺未遂を起こした。市販の風邪薬を多量に飲んだのだ。嘔吐と下痢と睡眠障害で、もがいていた岩本は、自分で救急車を呼んで、麻宮病院に入院した。あの時、病室で庸子が悲しそうな顔をしたのだ。

「次、乗り換えですよ。岩本さん。」

せつかくの妄想をぶち壊すように声を掛けた早田を、岩本はジロリと睨んだが、さっさと出口に向かう早田に、岩本は慌てて従った。駅名を見ても、ここがどこだか、岩本にはさっぱりわからなかった。ガランとした駅だが、周囲にはビルが林立し、どこかの地方都市なのだろうと思った。

「そろそろ、お昼ですからね、駅弁を買ってきましたよ。」
ふんと、鼻をくすぐる匂いに、岩本の腹は思い出したようにぐう

となった。そう言えば、いつから何も食べていなかったのだろうか。早田について半歩後ろからのそのそと歩き、駅の中を移動した。早田は時刻を見て、路線を確認しながら歩いている。岩本は何も考えずにいて行く。

そういえば、早田とは、いったい何者なのだろうか。

岩本は、ぼんやりと考えながら、早田の後をのそのそとついて行く。特急と書いてある電車に乗る。どこに向かっているのかも知らない。

早田は、愛想笑いを浮かべて、

「弁当を、食べませんか？」

そう言つて、ビールを差し出した。岩本は、早田に習つてもそもそと弁当を開けた。

「早田さん、どんなお仕事なんですか？」

「ああ、私？ソウシャですよ。」

「ソウシャ？」

「ええ。」

早田は、ニコニコと笑っている。ソウシャとは、何だろうと思つたが、岩本は、「ああ・・・」と知つたフリをして、頷いた。

「私も、聞いていませんでしたね。岩本さんは、どんなお仕事を？」

「あ、いや、俺は…ここんところ、少しだけ、失業中です。」

食べかけた飯が喉で詰まった。

ここんところ、だけか？いいや。

いつから、仕事をしていないかさえ、よくわからなかった。親父が残したあばら家に住み、親父の残した僅かな金を使った後、どうやって暮らしているのか、考えたことがない。銀行には、減ったはずの金がいづの間に増えていて、岩本は何も考えずに使っていた。時々、福祉の係りとかいう区役所の役人が来るが、いつも怒鳴って追いつ返していた。

「それは、大変ですね。ま、こんなご時世ですから・・・」

早田は、もしかしたらいいやつかも知れないと、岩本は思ってい

た。責めるようなことも、詮索することも言わない。

「美味しいでしょう？この弁当。私、この煮物が好きでしてね。」

味の甘辛い里芋を頬張りながら、早田がニコニコして言う。

岩本は、ビールを久しぶりに飲み、美味しい弁当を食べると、眠くなった。

「岩本さん、乗り換えですよ。」

早田に、揺り起こされて、飛び起きると、早田が前を進んでいる。寝起きの極端に悪い岩本は、苛々する間もなく、早田にのそのそとついて行く。いったいどれくらい、乗り換えたのだろう。ここは、どこなのだろう。駅のホームには、駅名が書かれてあり、行き先と乗り場と時刻をアナウンスする声が響いているが、岩本には理解ができなかった。

早田に続いて乗車する。

乗り合わせた老婆が、みかんをくれた。早田とニコニコして食べた。果汁が迸り実に美味いと思った。

「どこへ行くんえ？ほお？四万十さん？そんならいい時期じよ、鮎食べるんえ？」

早田が愛想良く話しているが、岩本には、四万十や、鮎というものにも何の関心も湧かなかった。

「そちらさんは、えろお大人しな。」

岩本は、その言葉にピクリと反応をした。大人しいとは、悪口を言っているのに違いない。喋られない人間を大人しいと馬鹿にする人間の言葉だ。

「沈黙は金や言うのん知らぬのえ？男シは、だんまりがええんじよ。」

「あつはつはあ、あんシあお父さんのこと引き合いにしてえ。可笑しい。このヒトの旦那さんが、おっしゃべりでおっしゃべりで、煩いもんだから、こんなこと言って……うふふ。」

老婆は、そう言って岩本にすつと蜜柑をもう一つ寄越した。岩本

は黙ったままそれを受け取って食べた。

岩本が老婆の言葉を理解しようと悩んでいるうちに、老婆たちは降りて行った。

怒ったり、訝しんだりすると、岩本はいつも眠くなるのだ。

早田に起こされた。

「着きましたよ。岩本さん。」

早田は、すたすたと降り、岩本はのそのそと従った。

第二話 廃人の末 1（後書き）

次は、岩本氏が四奏館へ到着し、庸子によく似た女性に逢います。

廃人の末 2（前書き）

官能シーン、残酷シーン在り。ご注意ください。
冒頭に、岩本氏を診察した、麻宮病院消化器科医師坪井の研究について記載しています。

魔人の末 2

坪井耕太郎は、麻宮病院で宛がわれた自室で、顕微鏡を覗き込み、興奮し、うろつくと部屋を歩き回りながら、何度も、幾つもの検体を覗き込むことを繰り返す。

長年追い続けていた、菌を見つけたのだ。

机の引き出しから、手書きガリ版印刷物の古書をそつと引つ張り出して、震える指でゆつくりと捲る。“長府育五郎著 病態異形論”驚異的な発見なのに、科学に揉み消された遺物。明治に自費出版されたその文献を、坪井医師は、古書店でただ同然で手に入れたのだ。妖怪、鬼、物の怪、祟り。その正体を解き明かしている書。

同じ著者による、“祟怪郷土詔における病態理論”は、国会図書館で見つけた。電子顕微鏡のなかった時代に、理論だけを述べていた書に、坪井が出会った時、坪井の長い間の疑惑が一気に解凍したと思つて興奮したのだ。

妖怪、鬼、物の怪、祟り。それを科学に検証するとすれば、祟りや憑物という症状は、痴呆症状に似ている。妖怪異形は奇形によるものであり、金属採掘場に労務する男女の間で生れている子に多い。貧しい家に生れた奇形児は早死にするか、生き長らえて奇形を見世物小屋に売られるかという結末を辿る。医学的調査の対象にもならず、知識人からは目を背けられるだけの存在である。鬼の正体とは、体内に巢食う常在菌の異形である。という理論。

その中で、長府は、人斬りや女鬨り、死肉嗜好という鬼の乱行は菌の働きによるものであると、明言している。こちらも、困った性癖として犯罪者として始末されるだけだ。精神分析どころではない。

理解の範疇とは、人間の狭い良識の中だけにある。

奇形児は見世物であり、現実ではない。人斬りや女鬨りは単なる犯罪であり精神異常症状ではない。現実には、そこに生きている張本

人を目の前にしてもなお、良識人は目を叛け、意識の外に押しやるのだ。

坪井耕太郎の母は、祖母の存命中に若年性痴呆になった。食事を摂ってもひもじいと食物を漁り、耕太郎を父と間違え、近所の少年を耕太郎と呼ぶ。祖母を死神と恐れ、昼夜の区別なく徘徊し、幼女のように騒ぎ喚く母を、祖母は狐憑きといい、祈祷師を呼び、母の身を打ちのめしながら狐を本気で祓おうとしていた。母は、祖母と祈祷師によって身体的虐待を受けながら、家族に止めさせなかった。あの頃に、父は、狂った母と祖母のいる家から逃げ、女を囲った。中学生になったばかりの耕太郎は、崩れた家族の真ん中で、全くの無力だった。

母が死に、今度は祖母が心痛で痴呆になった。祖父も父も祖母から目を叛け、祖母はひっそりと狂いながら、施設に入れられた。

家族を狂わせた痴呆と闘いたいと思ったが、医大に進み、精神科医を目指す頃に、長府育五郎の書を古本屋で見つけたのだ。現代医学では、痴呆が精神医学で認識されている。耕太郎は、長府の理論を実証してみたくなった。

医大で多くの病態を学ぶうちに、人間の嗜好と病態の關係に並ならぬ関心を深め、消化器系への道を目指した。

人間の胃や腸に常在する菌は、千差万別であり、無限の新種を生み出す。

麻宮病院は、内科系医師が不足している精神科病院だった。坪井は、長府の学説が誰にも相手にされなかった理由がよくわかるので、探究心を胸の内に秘めていた。ただ、麻宮院長に申出て、すべての患者の検査サンプルを検体業者に提出するのは別に、調査するという許可だけを得ていた。麻宮院長は、坪井の勤務態度と、所属する医局大の権威を信じて、快諾してくれていた。

坪井は、幾種もの腸内常在菌の変種を発見していた。

妻の死体食ってしまった男の腸内菌に、大腸菌の異形を見つけた。人間が腐乱していく人肉を最初は生で、そして加熱して食う、

その嗜好に作用していると独断していた。

自殺願望と自己喪失の甚だしい、岩本すぐるという患者の胃に、胃潰瘍、胃の粘膜下にあり、胃酸の中でも生き、自の胃壁を消化してしまふヘリコバクター・ピロリ菌に非常によく似た、突然変異異種を発見したのだ。同じ菌の異なる形が腸にもあり、全く別の形で血液中にもある。こんな例は、初めて目にするものであった。

坪井耕太郎が、岩本すぐるの主治医、今里に、すぐるの検査を出たとき、既に岩本は退院した後であった。

湯船で寛いでいた岩本は、仲居と早田の話し声を座敷の方から聞いて、ざばつと湯船から出た。浴衣を羽織つて座敷に行くと、一枚板の広い座卓いっぱいに見事な膳が並んでいた。

「岩本さん、食事を一緒にしましょう。こちらの部屋の方が広いのでね、失礼していますよ。」

早田の愛想笑いにつられて、仲居も笑顔で膳を並べている。

「お客様、女将が後ほどご挨拶に見えます。玉枝さんがご挨拶をと部屋の外で待つておりますが。」

「ああ、玉枝さんが？そうですか。どうぞ、入ってもらってください。」

早田の顔がデレツとなり、岩本に意味あり気にニヤツと笑ったので、岩本は、玉枝というのが、早田のお目当ての女だと察して笑った。庸子に似た女将がいるといいながら、しっかりお目当ての女を呼んでいるのか。

仲居に呼ばれて入ってきた玉枝を見て、岩本は息を呑んだ。和人形、そういう形容が相応しいかどうか分からないが、眉の上で切り揃えた黒髪が、腰までサラリと垂れ、真っ白い透き通るような素肌、艶やかな目元、年は若いのか熟れているのかわからない。

玉枝は、黒地に艶やかな紅牡丹の着物が似合う。しなやかな腰で丁寧に三っ指をついて挨拶をして、岩本に先に酒を注いだ。甘い花の

ような香りが鼻をついた。玉枝は、ぺたりと早田の傍に座り、早田と親しそくに微笑みを交わしている。

岩本は注がれた酒をくいつと飲んだ。美味い。菜に箸を伸ばして口に含むと、それが何かはわからないが、上手い。こんなに空腹だったのかと自分でも驚くほど、早田と玉枝のことが気にならないくらい没頭して食べた。

満腹にふうつと息をついた頃、鈴のような声がして、振り向くと庸子がいた。庸子と思ったが、庸子に瓜二つの女将が、和装で三指をついた。

「遅くなりまして。本日は、ようこそ、四奏館へおいでくださいました。お食事の方は、すすんでいますでしょうか？」

「女将、大変美味しいですよ。」

早田が玉枝を隣に侍らせて上機嫌で言う。

「それは良うございました。」

女将は、岩本の横にすつと膝を進めて来た。

「お酌、させていただいても宜しゅうございますか？」

「は、はあ…おっお願いしますっ。」

岩本は裏返ったような声を出した。自分でも驚くほど大きな声に、急に恥ずかしくなった。

「いらつしゃいませ。どうぞ…。」

「はいっ。」

岩本の杯にとろりとした酒を注ぐ。岩本は注がれるまま杯を開けた。

「岩本さん、女将にも返杯を、女将にも、あなたの杯で飲ませてあげなさい。」

早田の言葉に、岩本は、慌てた。女将は、ふふつと艶やかに笑うと、

「甘えてよろしいの？」

鈴のような可愛い声で言うと、岩本をチラと目の端で見上げた。硬直している岩本の横で、岩本の酌を受け、真っ白い喉を見せ

て杯を飲み干した。岩本はごくりつと唾を飲み、庸子にそっくりな女将を見つめた。

「さ、岩本さんも、どんどん、お飲みくださいませ。」

注しつ注されつ杯が進むと、岩本はフワフワと浮いている気分になった。女将は、志乃と呼んでと、甘えた声で岩本に囁いた。

「志乃さん。」

「すぐる様。」

志乃は岩本すぐるの名を呼ぶ。

「志乃さん。」

「すぐる様。」

いつの間にか、早田と玉枝の姿はなく、部屋についている手洗いに何度か立った後で、志乃の姿が見えなくなっていた。岩本は志乃を半泣きになって探す。湯殿から微かな使い湯の音が聞こえた。岩本は岩風呂に行く。黒い岩の中で志乃の真っ白な背中が見えた。

「志乃さん。」

「すぐる様。」

「私、少し、酔ってしまいましたの。」

「志乃さん。」

「すぐる様、お背中をお流しますわ。」

瀬虫のような猫背に瘦せて肩甲骨の浮いた背に、志乃の真綿のような乳房が微かに触れる。岩本は熱い志乃の乳房と脇腹をもっと感じたくて、ゆるゆると背筋を伸ばした。

志乃は丁寧な岩本の汚れた身体を優しく擦った。脇腹を洗いながら志乃の華奢な両肩がすっぽりと岩本の胸の内に収まる。岩本はギョツと目を閉じて、奮えていた。目を薄く開けて見下ろすと志乃の抜けるように白く熱い肌が動いている。志乃の柔らかな手が、手拭を掴んだまま、両の太腿も内を撫でた。

「うつ・・・うつつ...志乃さん...俺あ...」

岩本は熱い下腹部を両掌でぎゅうつと押えた。

志乃は、岩本の足の指を丁寧に洗う。岩本の下腹部が志乃の肩に

当たる。岩本は、夢中で志乃の背を撫で、息を荒げた。

「お、俺も…志乃さんを…洗って、やる…。」

岩本は、志乃の両肩を掴み、自分が座っていた岩の椅子に座らせ、志乃の手から奪った手拭に石鹸を塗った。

志乃は神々しい程に美しかった。

岩本は志乃の前に膝をつき、震える手でゆるゆると志乃の真っ白で皇かで柔らかい肌を、撫でるように擦りはじめた。

「はっ…ああ…すぐる様…。」

乳房が揺れ、岩本の手にながら志乃は反応し、下腹部の繁みから熱い涙を滴らせた。

岩本は湯船に浸かった。

腕の中にもたれるように、柔らかな志乃の体があった。

夢つつつの中のような恍惚感に包まれながら、岩本は志乃の両の乳房を掌で弄んでいた。志乃の両手が、岩本の下腹部を擦る。

「志乃さん…。」

岩本が薄目を開けて、愛しい志乃を見た。

志乃が潤んだ瞳で岩本に向け、紅色の薄い唇をそつと首を伸ばして岩本に向けた。岩本が志乃の唇を吸おうと顔を近づけたとき、志乃の唇の奥に白銀の剃刀のような牙が見え…次の瞬間、岩本の喉に激しい激痛が走った。

「つつ…」

岩本は声を漏らす。喉に唇を押し当てたまま、志乃が湯船の中で岩本の下腹部に跨った。強烈な刺激が岩本を襲う。志乃の両手は岩本の首を掻き抱き、締め上げる。喉の激痛と、下腹部の甘い痺れに、岩本は、呻いた。

・・・殺される…

岩本は遠くなる意識の中で、ゆらゆらと腰を揺らす志乃を抱締めた。

…いい…俺あ…このまま死んでもいい…志乃さん…

廃人の末 2（後書き）

続きも、よろしく願いします。

廃人の末 3（前書き）

官能シーン在り。ご注意ください。
岩本氏が、適応反応をみせて行きます。

魔人の末 3

どのくらい眠ったのだろうか。

ふかふかの広いベッドで、岩本は全裸で目が覚めた。

「ぐっすりお休みでしたね。朝餉の用意を整えさせていただきました。」

昨夜の仲居が言う。座卓を見ると、一人分の見事な朝食が並んでいる。

「早田さんは？」

「栗の間でございますよ。早田様は、もう朝餉もお済になり、森を散策されております。岩本様には、どうぞご自由にお寛ぎくださいと伝言を言付かっております。夕餉にはご一緒されるそうでございます。」

岩本は、首に何気なく手を当てた。僅かな腫れがあるようだった。
「し、・・・いや、女将さんは？」

「女将は、接客でございます。：夕餉に、お顔を見せられますよ。」
仲居は含むような言い方をした。

「この辺は、随分辺鄙なところでございますが、遊歩道もあり、空気が景色が散歩には良うございます。」

仲居がいい、静かに去って行った。

朝餉を済ますと、岩本はぼおつと湯に浸った。

昨夜は、志乃を抱いたのだろうか？しかし、岩本の記憶は、湯船に使ったところから消えていた。

岩本は、ぬるい湯船に浸り、上がると眠った。

カタカタと小さい物音がして、目を覚ますと、仲居が、座卓に昼餉を並べていた。

「昼餉の用意を整えさせていただいております。」

岩本は、見事な昼餉を平らげた。朝も凄い量の食事を飢えたよう

に食べたのに、昼もまた、たまらない空腹を覚え、舌を唸らす料理をガツガツと平らげた。

ふうつと息をつくと、また、湯に漬かりたくなり、湯に浸かった後は、また、眠くなった。

「ふつつふ、岩本さんは、お疲れなんですよ。眠らせてあげてください。」

早田の声が遠くから聞こえ、岩本はむくりと起きた。

朦朧とする頭の中で、「夕餉でございます」と、仲居の声が遠くから聞こえた。

夕餉…？ならば、志乃に会える…。岩本は、のそりとベッドを降りた。

朦朧とした頭なのに、並んでいる夕餉を見ると、押さえ切れぬ空腹感が湧き、ガツガツと飢えたように平らげた。

クスクスと忍び笑いが聞こえ、重い瞼を上げてみると、岩本はベッドに横たわり、両脇から志乃と玉枝が岩本の体を愛撫していた。

「お姉さまずるい。次はあたくし…」

チロチロと擦る様な愛撫を下腹部に感じた途端、岩本は「ぐう」と声を上げて仰け反った。岩本の起立した肉の前に、美しい顔が2つ並び、競うように紅い舌を伸ばして肉を舐め、含む。

仰向けに横たわった岩本の下腹部に、玉枝が腰を落とす。

志乃の紅い舌が岩本の唇を吸う。真っ白な玉枝の乳房が岩本の上半身の上でのたくっている。

二人は岩本を真ん中にして、交互に跨り、蠢いた。岩本は気の遠くなるような長い時間、何度も何度も狂おしいばかりの熱を下腹部に感じる。果てることのない波が、体の芯から打ち出て行く。

「嗚呼…」

仰け反る二つの白い女身は、トグロを巻く蛇のように、岩本に絡みついたまま、ぬめぬめと揺れる。

岩本は女たちを掻き抱く力はなく、横たわったまま、女たちのな

すがままに、波打つ熱を迸らせ続けるだけである。

幾晩、幾度、志乃と繋がったか。玉枝と繋がったか。
岩本は朦朧と眠っていた。

真っ白い光が見えた。

俺は、死んだのか？

岩本は、真っ白い光の中で、体中に溜まっていた汚れが浄化され
尽くして、軽くなったような、いい気分で漂っていた。

ずっと虚ろだった脳が、やっと覚醒したかのように、清々しく、
うんっつと大きく息を吸い込み、伸びをした。

白い光はたちまち消え、鼻の傍から暖かく甘い花の香りがしてい
る。うつすらと目を開けると、黒い柔らかい長髪の下に、可愛らし
い志乃の顔が見えた。すうすうと深い寝息を立てている。

岩本は、覚醒した頭でゆっくりと状況を把握していった。

四奏館の豪華な客室のゆったりとした寝心地のいいベッドの上で、
子猫のように丸まった志乃を抱いて眠っていたのだ。

裸身の志乃に口づけをして、岩本は、初めて自らの意思で、志乃
を抱いた。

夢うつつの中で、志乃は岩本の喉首に牙を突き立て、跨って岩本
の命や血潮を吸い取ろうとしていたように思えたが、今、しっかりと
と岩本の胸の下に抱きしめている志乃は、物の怪ではなく、紛れも
ない可愛い女なのだ。

「嗚呼…すぐる様あつ…。」

志乃は岩本の腕の中で、身を震わせた。

夕餉を仲居が運んで来た音がして、仲居と早田が、座敷でなにや
ら話しているのが聞こえて、岩本は目を覚ました。

「…岩本様はぐっすりお休みでございますよ。」

「見違えるように、元気になりましたなあ。」

「女将さんの献身でございますよ。」

「志乃さんにねえ…ふふふ。」

「早田様、今日のお散歩は、いかがでございました？上の滝は…。」
「うん、なかなか気分いいものでしたよ。散歩は、実にいいものです。」

早田の声が聞こえて、岩本は、ベッドから裸体のまま起き上がった。早田に挨拶もせず、岩本は湯船に浸った。体力がむくむくと回復するような気がして、岩本は堂々と湯から上がる。

「やあ、早田さん。今日は、散策に出ていたそうですね。」

「岩本さん、この上に見事な滝があるんですよ。明日にでも、遊歩道を散歩されるといい。」

「そうですね。明日は、歩いてみることにします。」

岩本は、ニコニコと答え、匂いに誘われて座卓を見た。いつも通り全く別のメニューで見事な膳が座卓いっぱいに広がっている。

「さあ、いただきますでしょうか？岩本さん。ここにいと、腹が減りますなあ。」

「そうですね。うまい空気のせいでしょうか？」

「ここは、空気も水も何もかもが美味いんですよ。」

「いいところへ、連れて来ていただきました。早田さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、喜んでいただけて、私は、満足しているんですよ。」

岩本は早田と旧友のように話しながら、ガツガツと飢えたように膳を平らげていく。

「こんばんは。」

玉枝が入って来る。玉枝を囲んで、話に花が咲く。

宿は古く、何代にも渡って娘が継いでいるという。宣伝をしておらず、早田のような常連が、客を連れてくることで賄えているということだった。他の客もいて、別の姉妹が接客中ということだった。部屋から一步も外に出ていない岩本は、当然誰とも会わない。もとより他の客のことなど気にはならないが、志乃が他の客にもついて

いることを思うと、狂おしいような嫉妬が湧くのだった。

「こんばんは。遅くなりまして。」

鈴のような声、志乃だった。岩本はそわそわとし、早田と玉枝がくすつと冷やかして笑うが、岩本は堂々と、志乃をかわいいと褒めた。

「待っていたよ。志乃さん。」

「まあ、すぐる様…嬉しい。」

志乃の注いでくれる酒は甘露水のように岩本に染み入る。志乃は杯が進むほどに、頬をほんのりと桜色に染める。

「志乃さん。」

「すぐる様。」

囁きながら言葉を交わす。父母が亡くなってから妹と一緒に切り盛りをしているので、一日に何組もの客の世話ができないと言う。

「独りなの？」

「ええ、だって、誰もお嫁にもらってくれないんですもの。」

岩本は、ならば自分の嫁に、と、言いかけて言葉を呑んだ。養えぬ、そう思いながら、この宿で働くのは出来るかも知れぬと、考えた。健気な志乃を助けてここで暮すのだ。岩本は、酒に朦朧とする頭で思考を巡らそうとして、そのままふっと意識を失った。

どのくらい、そういしていたらうか。

何日間、滞在していたらうか。

岩本は、朦朧とする頭を抱えて、起き上がった。

いつになく、体中に力が漲り、空気を花から吸い込むほどに、頭が冴えて来る。湯に浸かり、浴衣を羽織った岩本は大きく伸びをした。箆筥に仕舞い込んでいた自分の服を取り出し、仰天した。

筋肉で太ももも胸も太くなり、心なしか背も高くなったような感じで、服が入らなくなっていた。単に太ったというものではない。青白く病的なほど猫背で決めるような腹周りに肋骨が浮いていた体だったのに、憧れ続けた体軀が鏡に堂々と背筋を伸ばして映っていた。

落ち窪んでいた目に精気が戻りというより初めて見る生きた目、別人のような自分を岩本は両手で触った。紛れもない自分。

滋養の豊富な山海の幸に良質の湯、澄み切った空気に、静寂。それらすべてが、生きながら死人のようだった岩本を精気漲る人間に変えたのだろうか。

岩本は、大きく息を吸い、浴衣に半纏を羽織り、下駄履きのまま宿の裏の遊歩道を歩き始めた。

踏みしめる足に力を感じる。重くけだるかった体が軽い。以前は山道など分け入るうなどと考えたことがないのに、今は歩きたい。ぐんぐんと下駄のまま山道を歩き、あつという間に滝まで来た。喉の渴きを覚えて、滝の瀬に下りた。清水に口をつけて喉をならした。うまい。

これが自分か？

岩本は驚きながら、くよくよと考えずに、澆刺とした顔で天を仰ぎ見た。太陽がまぶしく、青空が広がる。晩秋の落葉を待つ赤茶けた木の葉が美しい。鳥の囀り、滝の音を心地よく感じていた。

岩本はいつ覚えていたのか、大きな声で歌を歌いながら、山荘に戻った。

「これは、岩本さま。お戻りでございますか。どちらまで？」

仲居が玄関に出迎えて、眩しそうな目を向けた。山荘の中は、外の光を浴びた岩本から見ると薄暗く見えた。

「散歩ですよ。あなたが、遊歩道の上に滝があると教えてくれたじゃないですか。」

「ええ、そうです。では、まあ、滝まで上られたのでございますか？」

「うん。見事な景色でしたよ。空気も水もうまい。」

岩本は、堂々と、自分の部屋に向かいながら、山荘の中の不思議な空気に違和感を覚え始めていた。ひっそりとしすぎる。豪奢な建物と調度に囲まれた空間が空々しく、生きている人間の気配が薄い。

岩本は、山荘の中をあちこちと歩きながら、覗き回った。

おかしい。何かがおかしい。

仲居と岩本のほかには、誰もいないような気がするのだ。

「仲居さん、早田さんは、栗の間だと言っていましたね。」

「左様ですが、お休みでございます。」

「お休み？具合でも悪いんですか？」

「さあ、それは存知上げませんが、ごゆっくりなさっていらっしやいますので、お訪ねならば、この私が伺って参りますが。」

「いや、起こすまでもありません。」

仲居が青ざめた顔で狼狽えたので、岩本は怪訝に思った。

おかしい。この山荘はどこか、おかしい。

岩本は中庭に立って、山荘を見上げた。見事な和造りの館。磨き上げられた古い館。ただ、静か過ぎる。

「うつうつ・・・」

何かが呻くような声を聞いた。人の声か、獣の喉の音がわからぬほど低い声だが、確かに聞こえる。

岩本は、庭から声のした方にゆっくりと歩いた。

声が、明確に聞こえるようになった。

開け放たれた窓に、岩本は寄った。

「うつうつ・・・」

絹の布団に裸体で横たわった干乾びた死体から、呻きが漏れている。岩本は息を呑んだ。死体と思った男が、もぞもぞと動いて、

「うつ・・・うつうつ・・・うつうつ・・・」

細長い小枝のような指で喉を掻き毟りながらもがいている。

なんだ？これは？まだ、生きているのか？

「し...志乃...」

志乃？志乃と呼んだか？この男...

岩本はその場に立ち尽くした。

部屋の造りは岩本の部屋と同じ。岩風呂があり、大きなベッド、洋間と座敷のある広く豪華な造りの部屋。同じベッドの上で、干乾びた男がもぞもぞと苦しそうに呻いている。

「うつうつ・・・志乃・・・」

目を閉じ、志乃の名を呼び、喉を掻き毟る仕草を繰り返す。呼吸は浅く、どす黒い肌色は青味掛かり、絹地の艶やかな紅い布団が一層この男を死人に見せる。

ぎよつとしている岩本の背後に、仲居がひっそりと立っていた。

「昼餉が整いました。ございます。岩本さま。」

「仲居さん、あの人は病人なのですか？」

「はい。養生中のお客様でございます。さ、ささつ、どうぞ、お部屋にお戻りを。」

仲居のか細い手に袖を掴まれて、岩本は振り返りながら歩き出す。
「他のお客様のお部屋を覗くなど…謹んでくださいませ。」

「ああ、それはまずいことをしてしまった。だが、しかし…あの人はどんな病気なのかはわからないが、医者にかかっているのですか？」

「他のお客様のことは、何も申し上げることはありません。」

仲居は、じつと岩本の目を睨んで嗜めた。

「そうですね。すみません。」

仲居は、ささつと支度を済ますと、部屋を出ようとした。

「仲居さん、女将は？」

「は、お留守でございます。何しろ、この山荘は従業員が少のうございますので、女将も買出しなど、忙しくされております。」

「ああ、そうですね。」

岩本は、仲居が去った後をじつと見ていた。

見事な昼餉。幾日も滞在し、何度も食べているが、同じ菜が並ぶことはない。どのような腕のいい料理人がいるのか。館を見回したのに、厨房が見当たらず、膳を炊く匂いも感じなかった。こんがりと焼けた肉、炊きつめた煮物、カラリと揚げた山菜。どれも、手間がかかり匂いを出さないものはない。

まあ、いいか。

岩本が異常なほどの空腹を覚え、飢えたようにガツガツと平らげ

た。

いつもは、ここで風呂に浸かり、そのまま眠ってしまうのだが、岩本は湯に浸かって眠くならず、黙ってソファに背を持たせかけながら竹林を見ていた。

例えば、ここが人でないものが営んでいたとしても、どうということはないのだ。

目を閉じた岩本は、幾晩か共に褥を共にした志乃の甘い吐息と熱い身体と、岩本の愛撫に応えてすすり泣いた声と姿を思い出していた。満足感に浸りながら、岩本は、竹林を見ていた。

志乃は人ではあるまい。

だが、岩本は物の怪の志乃を愛しく思っていた。

とり殺されてもいいと、志乃を抱きながら思っていたのに、どうしたことが、岩本は、下界にいたときよりも、生命力に溢れているのだ。

馴染んだのだろうか。俺は……。

岩本は、唇の端を吊り上げるように笑った。

廃人の末 3（後書き）

続きも よろしく願いします。

廃人の末 4（前書き）

官能シーン、残酷シーン在り。ご注意ください。
岩本氏は志乃によって、化け物に適応して行くことを歡びます。

魔人の末 4

果たして、夕餉の膳が運び込まれるまで、岩本は起きていた。ずっと耳を澄まし、匂いをたどろうとしたが、現実の五感には何も察することができなかった。死に絶えたような静寂。遠い瀬の音、遠い小鳥の囀り、さわと竹林を渡る風の音。澄んだ空気、それ以外の気配をすべて消し去っていた空間。

座敷の戸が開けられたとき、夕餉の膳を持った仲居がいた。

「は、起きていらっしやったので？」

「そんなに驚くことはないでしょう？」

「失礼しました。」

「うまそうな膳ですね。どんな料理人です？僕は、お会いできませんか？」

「は？それは…女将にお尋ねくださいませ。」

「そうしましょう。」

仲居はいつになく、動揺しているように見えた。

今まで曇っていた脳が、ここに来てやはり、シンシンと冴えているのだ。

「岩本さん、こんばんは。」

「ああ、早田さん、今日はお休みだったそうですね。」

「仲居さんから聞きましたよ。遊歩道を上がって滝まで散歩に行かれたそうですね。」

早田はいつもの愛想笑いを浮かべておらず、真剣な目をしている。「はい。早田さんに、僕は感謝しているんですよ。ここに、連れて来てくださって、僕は、嘘のように回復しましたよ。」

「そのようですね。」

早田は、目にいつもとは違う光を見せて、岩本を見ている。岩本も、こんなにしげしげと早田を見たのは初めてののような気がした。

「そろそろ、帰りたくなつたんじゃありませんか？岩本さん。」

「ずっと甘えていて申し訳ないのですが、早田さん、僕は、帰りたくないんです。このまま、ここに居たいと思っっているのです。」

「ほお……」

早田は険しい顔をしたまま、岩本を凝視している。

「ここで、働きたいと、女将さんに申出してみようと思っっているのです。無理な話は承知ですが、僕は、ここですか、生きられないような気がするんですよ。」

「うむ……」

「ここに来るまでの僕は、実に、死人でした。」

早田が真剣な目をして聞いているので、岩本は続けた。

「ここに来て、初めて、生きていることを嬉しいと思いましたよ。」
「……なるほど。」

早田は、普段のように夕餉にも酒にも手をつけず、岩本の顔を凝視していた。気だるそうにぼそりと曖昧な発音で喋っているのか唸っているのかわからなかった男が、今は明瞭に、自称まで変えて堂々と喋っている。まるで別人である。早田は、岩本の変容振りに黙って頷いた。

「こんばんわー。」

玉枝の声がして、艶やかな着物を纏った玉枝が座敷に入ってきた。

「こんばんは。」

志乃の声が続き、二人は座敷の戸口のところで並んで座った。

「すぐる様…働いていただくことに致しましょう。」

志乃の声が優しく響く。

「それでは…志乃さん……。」

「さて、祝いの膳でございますねえ。どうぞ、すぐる様。人としての最期の膳でございますよ。ごゆっくりの堪能くださいませ。私は、後ほど参ります。」

志乃が、玉枝を連れて、去った。

「岩本さん、私が、付き合いますよ。どうぞ、お食べなさい。」

岩本は、膳を見ると異常な空腹を感じ、ガツガツと飢えたように平らげていく。いつもとは違い、酒を注がず、早田が一口も膳に箸をつけないことも、最後の膳といわれたことも、岩本は不思議とは思わなかった。すべてを平らげた後で、やっと人心地つき、岩本が満腹の溜息をついたときに、早田が、低い声で話し出した。

「この四奏館は、実は字が違うんですよ。死に送還する館。と、書きます。山荘の前に掲げた看板を読み、不吉さを感じて踵を返す者には、危害を加えぬという善意の名とでも言うのですかね。ふふふ——ここは、昔、神社があつたんですよ。千年ほど里人はずっと鬼を閉じ込めたこの地に、神社を祭って、鬼を封じ込める祈りを続けていました。それが、急速な過疎で、ついに、祈りを知っている血筋ごと絶えてしまったわけです。」

「鬼が、再び蘇つたと？」

「そう。封印の祈りを知る者すべてが死に絶えてしまったのでね。」

「鬼は、本当にいたんですね。」

「・・・私は、鬼に魅入られた、かつての人間です。私は下界で馴染めなかった人間なのです。ここに引き寄せられるように、急な探究心を出して彷徨つて来てしまった。そのまま、私は、玉枝に恋慕して居つきました。適応したのですよ。」

早田は、ニツと笑った。

「そして、送者になりました。」

「送者？」

「狩をして、生餌をここに持ち帰る、送る者ですよ。」

「僕は・・・あなたに狩られたんですか。」

「...あなたは、死にたい人でした。一人で死ねぬ愚かな人間。それが、あなたでしたね。」

「...あなたに狩られながら、僕はどうして死ねなかったのでしょうか？」

「もちろん、食うつもりでしたよ。何せ43歳。あなたの魂は多くの寿命を残していましたからね、我々にとっては極上のご馳走だっ

たのです。」

「我々？寿命がご馳走？」

「温い血、精気、靈気……人間は寿命も長く極上の餌です。」

「我々は、毎夜毎夜、あなたに牙を当てました。」

「は？」

早田は真剣な目をしたまま、喉の奥でクックククと笑った。

「ところがね、あなたは、我々の精気を奪うのですよ。」

「僕が？」

「志乃はあなたに吸われるのを承知で、あなたに褥を共にしながら、あなたに血をね、飲ませてきたのですよ。我々の中で、それが出来るのは志乃だけですからね。」

「僕が、志乃さんの血を？」

「我々の血などを飲めば、人間などひと時として生きてはおれません。恐らく、身を焼く猛毒でしょう。」

「では、僕は？」

「……あなたも適応したんですよ。フッフ。ごく稀に、いるのです。」

「私や、あなたのような体質の人間がね。……人間の世界で異端児されていた人間。実は、化け物だったと、いうわけですよ。」

「僕が……化け物？」

「人間からすれば、化け物ですよ。人間を餌にしている者など、人ではありませんからね。」

岩本は、早田の話を受入れながら聞いていた。

「では、僕が血を吸った志乃さんは？」

「あなた、見たんじゃありませんか？棕櫚の間の、男。」

「死人のようだった、あの男？」

「急遽、私がお連れしたんですよ。28歳の、希望に満ち溢れた青年をね。喰わなければ、化け物の変化には古い血を持つ志乃でさえ苦しんでしまいます。」

「あれが、28歳の青年？」

「そうですよ。志乃が喰った餌です。」

「餌…。」

岩本は、唇の端をきゅつと吊り上げて笑った。

ふふふふ

なるほど、そういうことか。

「仲居は、ヒサエと言う名の仲間です。まだ日の下を歩ける者です。私と同じ。ヒサエはこの館の仲居をし、私は、餌を運んでくる送者です。…あなたも、送者に、なれますが…」

早田はチラと上目で岩本を見た。

「…死ねませんよ。」

「ここで仕えられれば、死にたいなど思うものですか。」

「では…試練を、あなたに与えましょう。…これはね、私どもの善意であり、神、いえ、神と崇められた鬼の意思です。」

「試練？」

「一人…餌が要ります。」

「…私に、狩って来いと？」

「まだ、あなたは人間です。志乃の血で妖の力を持っていますがね。人間だけが、日の下を歩けます。人間には、怪しまれません。」

岩本は、早田がここへ吊れて来られた時のことを考えていた。

「あなたには、これがまだ札束に見えるでしょう？」

早田がいつの間にか取り出しているアタッシュケースを開いて見せた。ビシリと並んだ札束は、紛れもない壱萬円札だ。

「ふっふっふ。これが、惑わせの力ですよ。これを、お持ちなさい。」

「

早田は、アタッシュケースを岩本に渡した。

「金の威力は、人間にしか利かぬもの。ただし、この金とその頑丈になった体で、人間の世界で生きても良いのですよ。」

「えっ？」

「心配ありません。これは木の葉などではなく、真正正銘の札束です。人間に認識させることが出来ませんが、機械には無理です。真正正銘の札の幻惑です。」

「こ、これで…?」

岩本には、ずっと縁遠かった札が、ぼんやりとだが、岩本にとって価値がまるでない、モノにしか見えない。

「運転手は、我々の仲間ではないが、金で黙っている人間です。車を使って人里に降りれば、あなたは我々とは無縁に、その金を使っ生きていける。幻惑と言えど、人間の目には消えることのない金なんです。機械が認識しないだけで、使い方次第ですよ。運転手のような人間だらけですからね。」

岩本は、早田の目を見た。既に腹は据わっている。
「なるほど。試練というわけですね。」

早田は真剣な目のまま頷いた。

腐っていたような脳が、今は、志乃のお陰で覚醒している。このまま、人間の世界でも暮らせ、餌を連れて戻れば、ここでも生きられる。

岩本は、笑った。

化け物であることを知らなかったとき、人の世で生きる力を持っていなかったのに、化け物であることを知った今になって、人としても、化け物としても生きられるというのか。

会って見たい。鬼に。僕にも見えるのだろうか。

夜、志乃がスルリと岩本のベッドに入ってきた。

「志乃…僕は、餌を連れて戻って来るよ。」

志乃はクスリと笑った。

「すぐる様…志乃が、恐くないの?」

「恐い?何故?」

志乃の目を覗きこんだ岩本の目には、真つ赤に光る瞳が映った。岩本はその瞳が、ルビーのように美しく見えた。

「僕は、嬉しいんだよ。志乃さん。」

志乃は岩本にしがみついた。

「私を、鬼にした男に、逢わせましょう。あなたは、与弥太に気に

入られるかも知れません。」

「与弥太？」

「人間たちが、夜蛇神と畏れた男鬼です。」

「志乃も、昔は人間だったの？」

「忘れてしまうほど、ずっと昔に、玉枝と同じ、この里で生れたような記憶があります。人の姿の与弥太に、身も心もすべて捧げました。」

志乃は紅い目を潤ませて言う。岩本は不思議と嫉妬は涌かず、与弥太という鬼に会いたいと思いつながら目を潤ませた。

「うふふ・・・与弥太が呼んでいますわ。すぐる様・・・。」

志乃は、山荘の奥へ導く。厨房横の納屋の奥の扉は、地下へと続く真つ暗な岩窟に繋がっている。人間である岩本には岩窟に入った後納屋の扉を閉めてしまえば、暗闇にしか見えない。側面は狭い岩窟壁、素足に触る床は湿った岩のようにゴツゴツしている。志乃に手を引かれるだけが頼りだが、岩本に恐怖感はなかった。

地下道はどんどん下りに傾斜をしている。空気は動かず、頼に当たるのは自分が歩くことにより澱んだ空気を突っ切って起こる風だけ。

廃人の末 4（後書き）

続きは、早田氏と夜蛇神の狩のシーンです。

第三話 動く道 1

何かがおかしい。今日はいつたいたというのか。

ヘアピンカーブの入り組んだ大貫峠は、道が狭く車は離合しにくいため、地元の者でも滅多に通らない。余程観光コースに飽いた物好きか、人の目を嫌うカップルが、ふらりとやって来る他は、大抵、バイクの走り屋である。

柴田は、普段は税務署に勤める傍ら、週末にはあちこちのコースに出かけて、バイクレースに出る。ネットで参加しているバイク仲間で開催するレースには、時間と金が許す限り出場していた。

今回も、大貫峠で、少し慣れた者同士で行うレースが開催された。柴田はその主催者の一人であり、レースの参加者でもある。

一般車は、この峠を使わず、下のトンネルを使って横断するのだ。いつものように、峠に繋がる出入り口2箇所に配置を置き、万全を期する。最近は、この手のレースの掛け金も上がり、観客もつくようになっていた。

柴田は、調べたばかりのバイクの威力を確かめたくてうずうずしていた。このタイムレースに1位になれば、数十万の金を手にすることができる。参加者6名は、あちこちのレースで顔を合わせるベテランでもある。負けるわけにはいかなかった。

コースは1本道しかない。

籤引きで走る順を決める。柴田は4走目になった。1分間隔で発車する。出来るだけ追い越しにかかる危険を避けるためでもある。

1走目が発車した。2走目・・・柴田は、快調に発車した。

ヘアピンカーブを道いっぱいを使いながらスピードを落とさずに曲がるのがタイムを左右する。柴田のバイクは軽快なエンジン音を轟かせ、新しいタイヤは順調な走りを見せる。3走者のエンジン音が聞こえ、背中が見えた。上り坂なのにブレーキを多用しながら走っている仲間を、柴田はスイッと抜く。狭い道だから、抜くにも

技法を使う。相手は、抵抗を見せずに抜けた。2走者の音を捉えた。もうすぐ頂上になる。下りはブレーキを使わずに加速する最も技術が物を言う場面になる。頂上前で2走者を抜き、下り出してから1走者を捉えた。

ぐんと追いつき、追い越そうとした。1走者の男は、抜かれまいと抵抗を見せる。抵抗は、事故のもとになる。柴田と相手の事故を隣り合わせにした心の駆け引きが始まる。1走者が柴田の牽制に失敗して、ヘアピンカーブのガードレールに激突した。柴田はその隙に、1走者を追い抜いた。

誰も柴田を抜ける者も、迫る者もない。

爽快な気分の中に、1走者の事故が少し気になる。そこまで過激にぶつかったわけではあるまい。柴田は、軽快なエンジン音を轟かせて走る。

もう、そろそろゴールが見える頃なのだ。

このコースの距離を計測したのは柴田であり、ゴール位置は、柴田が路面にチョークでラインを引いたのだから、よく覚えている。

ゴールはいつまでも見えず、ヘアピンカーブはエンドレスに繋がっているような気がする。

何かが、おかしい。

トンネル上の数キロだけが峠になっており、頂上もただの通過点に過ぎない。登って下る。下りの方を少し長めにコース設定をしているだけだが、何故、一向にゴールが現れない？

何かが、おかしい。

柴田は、止まり、エンジンを切って、耳を澄ませ、周囲の景色を見回した。鳥の鳴き声が聴こえただけで、聞こえるはずのバイクのエンジン音が全く聞こえない。携帯を取り出したが、電波が届かない。柴田は、舌打ちをして、引き返した。

頂上を目指し、下る。先程1走者を抜いた位置には誰もいなかったし2走者を抜いた場所にも記憶がある。

もしかしたら・・・ガードレールにぶつかったアイツが、重症だ

ったのかもしれない。

柴田は、恐る恐るスタートラインまで走って来た。

まるで、嘘のように、すべてが蛻の空。あれほど集まっていた関係者もギャラリーもない。峠の入り口で見張っていた人もいない。峠の下には、トンネルに通じる道を車が普段どおり横行している。

は？何なんだよ？いったい。

柴田は、ゆっくりと峠をバイクで走った。柴田のバイクのエンジン音だけが響く。

もしかしたら、俺を待つて、ゴールに誰かが待機してるかもしれない。この山では、誰の携帯も電波が届かないはずだからな。

柴田は、峠を走る。

絶対に、おかしい……

頂上から下りに入ると、ゴールも峠の出口もないのだ。延々に緩やかに下るだけ。

柴田は、舌打ちをして、頂上を目指し、一般車が横行しているトンネルからゴール方向の峠の入り口を目指そうと思って、走った。

悪戯んなよ……

今度は、頂上が現れないのだ。何故？登っても登っても、頂上が見えない。延々と同じヘアピンカーブが続くだけ。柴田は、ムキになって登り続けるが、同じである。頂上は出てこない。

閉じ込められた？

頂上と、ゴールまでの峠の道に、柴田は閉じ込められたのだ。

嘘だろ？あり得ねーし。こんなことって……

柴田は、ガソリンだけは走るだけ忠実に減っていくメーターを忌まわしく見て、バイクを止めた。

道ではなく、周囲の山に目を向け、景色を見ていた。

晴天であり、アスファルトの割れ目から雑草が芽を出しているのが見える。山は濃い緑の葉を茂らせた木々に覆われている。

出口がない。という以外に、何もかわったことがない。

柴田は、荷物を仲間の車の中に置きつ放したことを後悔していた。

何度も会ったはずの連中だが、ネット上で知合った架空のニッケネームで呼び合っていた関係に過ぎない。何もかもがまやかしだった。全て架空の世界だというのが。これは。

柴田は怒りに似た感情を燦らせ、天を睨んでいた。

突然、道の下から、ふうふうと息を切らせながら、眼鏡をかけた冴えない中年男が歩いて登って来た。登山ではなさそうな、サラリーマンの仕事着のような格好。山なのに革靴を履いている。

「柴田さん、こんなところにおいででしたか。」

「・・・誰だい？あんたは？」

「あ、あたしは、早田と申します。」

早田は、愛想笑いを浮かべた。

「・・・ちよつと待てよ。早田さん、あんたは、どこから登って来た？」

「どこからって、この峠の下ですよ。ニックさんが、大怪我をされましたね。救急車で搬送されました。」

ニック？ああそうか、1走者のHNはニックって言ったつけ。大怪我？

柴田は、しまったという顔をした。やはり、重症だったか。

早田は、愛想笑いの目を深刻そうにしながら、

「今日のレースは中止です。私は、それをあなたに伝えに来たのですよ。」

「中止？冗談でしょ？俺は1位だったんだよ。」

「え？柴田さん、皆さん、既にゴールされていますよ。セナさんとライトさんが、ニックさんを運んで来たんです。順位なんて、ありませんよ。強いて言うなら、セナさんとライトさんですよ。さあ、もう、皆さん、それぞれの宿泊所へ戻られました。柴田さんも、どうぞ。」

セナ、ライト、ニックというのはネットを介して知合った、一緒にレースをしていた仲間の名前だった。柴田は、ジョーという名で登録している。この男は、柴田だけ本名で喋った。

「・・・宿泊所?・・・どうぞって、何です?」

怪訝な顔をしている柴田に、早田は困ったような顔をした。

「・・・どうか、なさったんですか?柴田さん。私は、山荘四奏館の早田ですよ。今日、あなたが泊りになる宿の者です。お荷物は、お預かりしています。さあ、どうぞ。」

「どうぞって、何だよ?俺は、バイクで、あんたは歩きだろ?・・・俺はあんたを乗せないぜ。」

「あー、滅相もございません。お客さんに乗せてもらうんですけど、んでもない。私は、このまま、山道を降りますので、柴田さんは、この道をまつすぐ下って下されば、案内が出ておりますので、わかりますよ。」

出口があるのか?と、聞こうとして止めた。

「・・・この道は、あんたのいう山荘に繋がっているのか?」

「そうです。この道をまつすぐ下ると、左折するところに、案内表示をかけています。じゃ、お待ちしていますね。」

早田は、道の全くない木々の生えているだけの山肌へ、ガードレールをヒョイと飛び越えて、降りて行った。

柴田は、早田の背中をしばらく見てから、バイクに跨りエンジンをかけた。

変な宿に泊るワケないだろ?とにかく、急いで道を抜け出そう。

早田の言ったとおり、道沿いの左折の脇道に、山荘四奏館の木製の看板がかかっていたが、柴田は素通りして、峠の出口へと急いだ。しかし、行っても行っても、さっきと同じ、峠の出口は見つからないのだ。そのうちに、ガソリンのメーターがEを示した。いつの間にか、日が落ち、夕日がオレンジ色に空を染め、沈もうとしている。チクシヨウ・・・

柴田は、Uターンして、山荘四奏館へと向かう。ものの1・2分も走らないうちに、右折の看板が現れた。

どんなトリックを使ってるんだ?

・・・行ってやるうじゃないか。

その山荘に、どうしても俺を呼びたいらしいな。
柴田は、右折した。

第三話 動く道 1（後書き）

続きます。

動く道 2（前書き）

残虐シーン 官能表現在り。ご注意ください。

動く道 2

バイクは山道を下る。バイクが走れない悪路になったところに、ガス欠で止まってしまった。バイクのライトが消え、辺りは真っ暗で何の音もない。闇に目が慣れると、ぼんやりと前方に灯が見えた。

「遅かったですね。日が暮れてしまいましたよ。」

早田が、旧式の提灯を掲げて立っていた。

「ささ、お腹も空かれましたよう？夕餉の支度も整っておりますし、女将もお待ちでございます。」

柴田は、警戒しながら、早田の後ろをついて歩く。

竹林が見え、その中の道を進むほどに、手入れが行き届いていることがわかる。本当に、ただの宿なのか？

柴田の目の前に、立派な風格の純和風旅館が現れた。

「ようこそ、四奏館へ。」

早田は、言うと、引き戸を開けた。

「ようこそ、おいでくださいました。当山荘女将の玉枝でございます。」

柴田は、玉枝の顔を見て、一瞬息を呑んだ。

美紗堵・・・

柴田が、恋慕している人妻、美紗堵。上司の妻であり、同じ団地に住んでいる。独り者の柴田に何かと親切にしてくれる、美しい美紗堵にそっくりな女が、和装で、三つ指について柴田を見上げている。

「お待ちしておりました。さあ、どうぞ。お部屋にお食事も用意しております。」

柴田は、ゆつくりと玄関を上がった。

背丈もスタイルも、美紗堵に瓜二つなのである。

少し茶に染めた髪、厚めの唇、華奢な撫肩。声まで、美紗堵そのものだ。

直属の嫌味な上司の自慢の妻で、子供のいない家庭に、上司は柴田たち独身連中をよく招いた。美紗堵の料理は美味しく、突然の柴田たちの来訪に嫌な顔ひとつせずに、応対してくれる人。何度も夢の中で柴田は美紗堵を抱いていた。

玉枝が部屋へ案内した。

確かに、部屋には柴田が仲間に預けた荷物が置いてあった。

見事な膳が1人分用意されている。それを見ると、急に空腹を思い出した。昼から何も食べていなかった。喉もからからだった。

「おビールでも、いかがでしょう？ 喉が渴きになっていませんか？」

玉枝が、ペタリと柴田の隣に座り、下から艶やかな目で柴田を覗きこんで微笑んだ。

柴田がグラスを持つと、玉枝がビールを注いでくれる。銘柄の知らないビールに、柴田はあまり不思議と思わず、ぴたりと寄り添って来る玉枝の髪の甘い匂いを嗅いでいた。

柴田はビールに口をつけた。旨い。ぐびぐびと喉を鳴らして呑むと、急激に空腹を感じた。飢えたようにガツガツと膳を平らげる。

玉枝は、美紗堵と同じ顔で、美紗堵のように、美味しそうに食べる柴田を嬉しそうに目を細めて見ている。

鍋から菜を取分けながら、嬉しそうに、「どうぞ」と、椀を渡す。柴田は、部屋の豪華さも、調度の品格も、不思議とは思わずに、玉枝に見惚れた。

膳を猛烈な勢いで食べつくした頃、玉枝が、とろりと熱い酒を杯に注いでくれた。呑むとカツと喉が焼けるようだが旨い。柴田は、玉枝のしなやかな体と美しい美紗堵にそっくりな顔を、撫で摩りながら、うつとりと酒を飲んでいた。

柴田が、玉枝の胸に襟元から手を差し込んでも、玉枝は、くすつと甘えたように笑っただけで、うつとりと目を閉じた。

柴田は、夢にまで見た美紗堵にそっくりな玉枝の唇を夢中で吸った。柔らかな乳房を摩りながら、柴田は玉枝を押し倒そうとした。

「……一緒に、お風呂にはいりませんか？」

「風呂？」

「ここでは・・・あたくし、恥ずかしい・・・。」

柴田が惜しそうに玉枝から体を離すと、玉枝は部屋に続く湯殿を掌で指し示した。玉枝は、柴田の前でゆっくりと着物を脱いで行く。真っ白い玉のような肌が現れた。形の良い乳房に、ゆったりと張った腰つき、スラリと長い手足。見惚れている柴田に、恥ずかしそうに玉枝は背を向けて、湯船に向かう。柴田は、もどかしい手つきで脱衣して、湯殿に行った。体を洗っている玉枝に抱きついた。柴田を、玉枝はゆっくりと振り向き、唇をそつと合わせた。乳房を揉み唇を夢中で吸う柴田に、されるがままになっていた玉枝は、柴田が少し唇を離すと、身をするりと柴田の腕から抜いた。

「お背中をお流しますわ。」

柴田は、大人しく玉枝に洗わせた。見れば見るほど、玉枝は美紗堵に似ている。

「あんた、本当に玉枝って名前なの？」

「・・・どなたかに、似ていらっしゃるの？」

「ああ。美紗堵って女に、あんた、そっくりだ。」

「・・・その方のこと、好きなんですね？」

「何故わかる？」

「・・・では、あたくしのことを、今夜だけ、美紗堵と呼んでくださいな。」

「いや・・・それは・・・。」

玉枝は、うつとりと柴田を見上げた。

「うつつ・・・美紗堵・・・。」

柴田は、美紗堵と呼んで、玉枝を抱き寄せた。

柴田は湯船の中で、美紗堵に繋がったまま、吠えるように、何度も美紗堵の中で果てた。

ガッ

首に鋭い痛みが走る。柴田は、美紗堵の中で果てながら、意識が遠のくのを感じた。

柴田が目を覚ますと、そこは光の一切届かない闇の中だった。手探りで、自分が裸体であり、床は泥と瓦礫、壁や天井は岩と滲み出る水であることがわかる。首がヒリヒリと痛む。指で触ると、二つの小さな穴のようなものがあつた。

噛まれたのか？美紗堵に似た女に。

ここはどこだ？

何かが、おかしいと思っていた。警戒していたのに、女に溺れて、このザマだ。あれが、美紗堵であるはずがなかったのに。

柴田は、時の経過もわからなくなっていた。

ここは、少し寒いが、裸でも凍えることはない。多分、体は床の泥だらけで、自分が排泄した尿のアンモニア化した悪臭が充満していた。何も飲んでもいない。食べてもいないが、空腹も、のどの渴きもさほどない。あまり時間は経過していきなきのもしれなかった。

柴田が、うつつに眠っているのか起きているのかわからずにいるとき、地響きと大きな岩が地を這う音がして、薄い蠟燭の灯が、差し込んだ。

「さあ、すぐる様、どうぞ、こちらでお待ちになって。」

女の柔らかな声がして、下駄を履いた体躯のいい男が現れた。

「誰か、いるの？」

男が、穴の奥に声をかけたので、柴田は、飛び出した。

「ああ、良かった。俺をここから、出してくれないかな。どうやら、何か変なことに巻き込まれちゃったみたいでさ。」

柴田は、至つてまともそうに見える岩本に、愛想笑いを浮かべて話しかけた。

「変なことに巻き込まれたって？」

「あ、俺、この上の大貫峠でバイクレースしてて、それで、迷つてここに来ちゃったみたいなんだよね。変な宿に泊らされて、眠って、

目が覚めたらここにいたってワケ。」

柴田の愛想笑いを浮かべた顔を、岩本は、穏やかな顔で眺めていた。その唇の端がきゅうつと釣りあがり、ニヤリと笑う。

早田が狩ったのか？活きの良さそうな餌だ・・・

「それは、お困りでしょうね。」

「ま、俺もこんな格好なんで、ちよつと、着る物を貸してもらえな
いかな？靴も、頼みたいんだけど・・・。」

「・・・どうして？」

「えっ？だって、俺、困ってるの、わかるでしょう？」

「お困りのようですね。」

「だから、助けてくれて言うてるだろ？」

柴田は、岩本に飛び掛った。岩本は、飛び掛られたときに、すつと体をずらし、スローモーションに見える柴田の手を払って後頭を押えた。ドウと音を立てて、柴田は無様に転がった。岩本は、自分の腕を嬉しそうに眺めた。そして、起き上がる柴田を、見て、声を出さずに笑った。

狩る者と狩られる者の存在。

かつて、自分を見下し、嘲笑い、無視した人間の象徴のような男。裸で夜蛇神の巢食う場所に餌として置かれている立場でありながら、人間界での常識を維持している男。バイクレース？困っている人を助ける？服を貸せ？・・・笑う。笑ってしまうではないか。

人間とは、このように哀れで滑稽な餌なのか。

「あんた、何者なんだよ？」

柴田が、目に恐怖と愛想笑いを浮かべている。岩本はゾクリと震えた。ああ、この感覚はたまらない。

ゾクゾクする。

立ち上がった柴田を岩本は、虫で遊ぶ幼児のような残虐さで眺めた。強がっていた柴田は、かつての自分を見下げたヤツラに見える。そういえば、学校では、サウンドバックにされていたっけ。こんな男だったよなあ。僕を虐めてくれたヤツラって・・・。

「ぼ、ぼお、やべでぐだびゃい・・・」

鼻と歯を折られて、血を流し、涙を流して、柴田が岩本に懇願した。

「ああ、痛かったですか？すみませんね。・・・でも、少し、大人しくしててくださいよ。あなたは、餌なんですからね。」

岩本が、這い蹲っている柴田に、上から囁いた。

「えっ？」

柴田は、驚愕の目を岩本に向けた。

柴田の視線の先に、黒い着物を身につけ、前胸と手足を剥き出しにした青黒色をした肌の、2mを優に越す筋肉質の牛頭の魔物を見た。魔物の傍らには、紅い目の美しい女が立ち、岩本をしつとりとした目で見詰めている。岩本は、柴田の後ろ頭を左手で掴み、ぐいと持ち上げた。

柴田が風船のように軽く感じる。ジタバタする柴田の動きが、岩本をゾクゾクさせる。

これが夜蛇神、与弥太か・・・

岩本は、魔物を恍惚の想いで見た。

柴田はガクガクと魔物を見て震えた。岩本に差し出されている柴田は宙吊りのまま、魔物に首をガブツと噛まれた。

「ぐあっ・・・」

激痛が走る。

柴田の左胸に、志乃は紅の唇をつけた。岩本は、飢えを感じ、ビクビクと体を震わせている男の右脇腹にガブツと食いついた。牙のない岩本は、噛み切った傷から迸る血潮を、舐めた。

「ああああああああ・・・」

柴田の断末魔の叫びが、だんだん弱弱しくなる。

岩本は、志乃が立てた歯跡から、迸る血潮を喉を鳴らして飲んだ。

志乃は着物の裾を翻して、柴田の下腹部に跨って揺れている。

柴田を貪り喰いながら、魔物と志乃は繋がり、志乃は、岩本に見せたことのない肢体で歓喜に悶えている。岩本はすすり泣きながら、

それを眺めていた。

岩本は、口の中に違和感を感じて、ペロリと舐めた。上顎から、白銀の牙が生えていた。牙が自分の下顎に内側から突き刺さるのだ。まあ・・・じきに慣れるだろう。

岩本に慶びがこみあげ、岩室の天井に向かって笑った。

動く道 2（後書き）

続きは、岩本氏が、狩に出ます。
読んでください。

第四話 狩（前書き）

残虐表現 官能表現在り。ご注意ください。

第四話 狩

翌朝、岩本は夜が明ける前に、四奏館を発った。

スーツに着替えて、アタツシユケースの中の金を財布に詰めた。

金は人間を釣る絶好のアイテムになる。金で苦しんだ岩本には、この紙切れの威力を熟知している。アタツシユケースを片手に持ったさまを、以前の岩本を知っている人間ならば、誰も岩本だとは思えない。

岩本は、住み慣れた東京に向かった。

早田に、狩りは人混みの中で行えと、助言を受けていた。

地の利もある東京の街は、ふんと饅えた臭いに満ちていた。猛毒ガスのような汚臭の中で、人々が蠢いている。

岩本は、以前ぶらぶらと当てもなく歩いた公園に行ってみた。

颯爽と顔を上げて歩く人間と、目的がなくなただ、苦悶の顔を浮かべて俯いて歩いている人間。

岩本は、餌を探した。

臭う。見える。

苦しみ、希望を失った引き換えに死を呆然と望み、死ぬ勇気を持たぬ人間。死んだところで嘆く者のいない人間。かつて、苦悩のどん底にあり、狂人としての日々を送っていた岩本ならば、同類の人間を、如何様にも嗅ぎわけられた。

岩本は、それらの人間をじつと眺めていた。

どの獲物にしようか…

この街に獲物は事欠きそうにない。

だが、岩本は自信に満ち溢れていた。自分と同じ、死を望んだものなど、狩る相手としては面白くない。生きる希望、野心、人を甚振ることに苦痛を感じぬ人間ならば、血も旨いに違いない。

岩本は、ぶらぶらと街中を歩いていた。

2人の面構えの悪い男が、路地で若い高校生くらいの少女に絡んでいた。少女は怯え、逃げようとしていた。

岩本は、かつて、この手のヤツラに、玩具のように遊ばれたことがある。そして、漫画で見たことのある、シーン。少女の危機を救う強い男。岩本は、首を振って肩を回した。

決めた。こいつらにしよう。

岩本は、漫画のシーンのように、少女の前に立ちはだかった。

「なんだよ。てめえ。」

「このお嬢さんが迷惑そうでしたよ。」

「すっこんでろ。この、ボケ。」

岩本に睨みを聞かせようと大声を張り上げる男の顔を見て、ニヤリと笑う。

「何ニヤついてんだよ。おい、おっさん。いいから、すっこんでろよ。」

以前は・・・恐かったなあ・・・コイツらのような男たち。

岩本の目に、力のあるものと悟ったのか、2人のうちの少し利口そうな男が声を落として言う。

「このお嬢さんの親父が、借金踏み倒して逃げたんで、このお嬢さんに働いて返してもらおうとしてるだけだよ。わかったら、そこをどけよ。」

「あ、お金ですか・・・いくらなんです？」

「はあ？あんたが払ってくれるっての？おっさん？」

「まあ、今の手持ちは限られてるんですがね。で、幾らです？」

「面白えこと言うじゃないの？え？おっさん？いっせんまん。なんだけだよ。あんたが耳揃えて返してくれんの？」

男たちは笑う。

つまらんな・・・金だけでカタがつくのか・・・

殴らせてくれよ。蹴らせてくれよ。僕は、強いんだよ。

岩本は、周囲の雑踏を疎ましく思った。愛想笑いを浮かべる。

「ああ、いいですよ。ただねえ、今、全額ってわけにはいきません

ので、とりあえず、半分だけなら。」

岩本は懷から、封筒を差し出した。男たちはひったくつて中身を調べた。

「金、じゃないの。これ、大金だよ。」

男たちは顔を見合わせている。受け取った男が数える。

「あ、それ、5百万あります。」

「はあ？」

「足りねえなあ、おい、おっさん、あんた、何モンだ？え？」

「あ、私、こういうものです。」

岩本は名刺を差し出した。“SS地所 営業部長 岩本すぐる”

「SS地所？土地屋が、何で、こんな・・・あ？おっさん、このお嬢さんを俺たちから買おうつての？」

「ま、そのようなものですかね。」

「ふーん・・・一千万の価値ね・・・ま、独り占めにしようってんだからな。」

男が、少女を上から下まで眺める。少女は岩本を凝視している。

「・・・もう、5百万もらわねーと、渡せねーな。」

岩本は、怯えきっている少女の顔をチラと見た。あどけなさを残しているが、これは器量良しである。この娘は、餌になるのだろうか。岩本は、

「一緒に、取りに来ていただけますか？もう半分、耳を揃えてお渡ししましょう。」

「取りにつて、高知かよ？」

「はい。銀行に納めていないお金で、お支払したいのでね。」

「まー、そりゃそうだなあ。」

男たちは、携帯でどこかに電話をかけていた。

まずい・・・

岩本は、顔を顰めた。誰かに電話をされるとまずいのだ。

「あ？はい。金を・・・わかりました。」

さて、明日の朝にどうやって電車に乗せようか。

「おっさん、今から、行こうじゃないの。」

「電車は、もう、ありませんよ。」

「寝惚けるなよ。俺たちが車を出してやるよ。」

「あー、それは助かります。」

「嬉しそつだな、え？あんた、そんなにこの娘が気に入ったの？」

「私の娘に似ているんですよ。」

岩本が鼻をすすると、男たちは腹を抱えて笑った。

岩本は、男たちの運転する車に乗った。

高速に乗ってすぐに、岩本は、早田に電話をかけた。

「岩本ですが、今、お客様を連れて社へ戻ります。男性2名に、高校生のお嬢さん1人。あー、5百万円を男性にお支払することになっていますので、用意の方をお願いします。」

岩本の声を聞いて、二人の男は顔を見合わせた。

岩本の隣で、少女、真弓は怯えきり、硬直したまま、泣きはらしていた。

男たちの運転は荒く、夜通し走り抜いて、岡山に明け方到着した。少女は寝息を立てて眠っている。

PAでトイレ休憩に立つ間も、男は少女と岩本に監視の目を緩めない。運転を交代して、瀬戸大橋を渡った。岩本は、車で長距離を移動するのは初めてだが、全く疲れを覚えない。

この男たちのことを化け物だと思っていたが、今では、哀れな子羊に見える。岩本は笑いたくなるのを必死で我慢した。

連れて行ってしまえば、あの男が掛けた電話のことも、与弥太が何とかしてくれる。

岩本は、確信していた。

早田との連絡を取り合う。PA下に、運転手が迎えに来ていた。男たちの車をPAの駐車場に残したまま、四奏館の車に乗りこんだ。車が山道を走るが、男たちは疲れきり、ぐっすりと眠っていた。竹林に近付いて、車が停車し、男たちを岩本が起こした。

「旅館？」

豪華な純和風の旅館を値踏みしながら見ている。

「どうぞ、こちらへ。まあ、少し、お寛ぎください。」

岩本が、玄関の引き戸を開けると、志乃、玉枝、ヒサエが、清楚な和装で丁寧に迎えた。

「いらつしやいませ。お待ちしておりました。」

ヒサエが、少女の手を優しく引いて、男たちから引き離す。

「おい、ちよつと待て。まだ、金は受け取ってない。」

「承知しております。ささ、どうぞ、こちらへおあがりください。」

早田が、腰を低くして、愛想笑いをした。

現金を、ロビーのテーブルの上に盆に載せて用意していた。

男たちは顔を見合わせ、先程、岩本が渡した封筒と合わせて、じっくりと確認している。携帯を取り出し、連絡しようとして、携帯を床に叩き付けた。電波が届いていないのだ。

「電話を、貸してくれ。」

「まあまあ、後で、宜しいじゃありませんか。」

早田と、岩本が愛想笑いをし、男たちに膝を摺り寄せた。

「他に、あれくらいの若いお嬢さん、いらつしやいますよね？」

「えっ？・・・ま、まあな。」

「ま、今後とも、よろしくお願いしたいものですなあ。」

男たちは、顔を見合わせている。

「さ、こちらで用意した女は、少女というわけではありませんが、ふふふ、それなりに、教え込んでおりますので、さ、ささ、お部屋へ・・・。少し、お愉しみいただけるといいのですが・・・。」

早田のヘラヘラとした愛想笑いに、すっかり横柄になった二人は、部屋へ入る。手元にある分厚い金の封筒さえ握っていれば、どうやらこの男たちは安心できるらしい。

広い豪華な座敷に洋間に内風呂と寝室。極上のスイートルームに二人は顔を見合わせた。座敷の中央の座卓には見事な料理が並んでいる。酒もある。

男たちは、胡坐した。志乃と玉枝が部屋に入り、濃厚な宴を始めている。

岩本と早田は、ヒサエが連れ出した少女の部屋を覗いた。少女は、ヒサエの横で粗末な食事をとっていた。

「いい土産ですね。あの子は、与弥太様のお気に召されるでしょう。」

ドアを閉め、早田が言う。

「与弥太様・・・あの、牛面の？」

「ええ。私は、あの方を見たとき恍惚となりましたよ。・・・ずっと昔からこの神社に封じ込められて、祟らぬよう、祭られていたのです。あの方は、神ですよ。神社の御神体です。現身の御姿に接すると通常の人間は悶死します。」

早田は、粗末な部屋に岩本を案内した。部屋というより、岩穴を部屋にしたもの。この山荘の後ろ側はすっぱりと大貫峠下山中に嵌るような形になっている。表と竹林側の側面には、豪奢な山荘の趣を持つが、厨房より奥は、山中の穴なのだ。ヒサエの部屋もその穴にあり、早田の穴も同様。

「日の当たる場所よりね、こちらのほうが、だんだん住み心地が良くなるのです。」

早田は、岩本に唇の端を吊り上げるような笑い方をした。

「・・・仲間入りですね。後悔はなさそうですし。」

「金があればね、ついて来る人間はうじゃうじゃいますよ。」

「金の威力は、昔に比べたら巨大になっているようですね。流石に与弥太様は何もかもご存知で・・・。」

「僕は、狩が楽しくて仕方ないですよ。あはは。」

「・・・それは良かった・・・私は、人間であつたときの記憶がどんどん薄くなっているの、送者は、あなたと組むようにさせてください。」

「もちろんです。」

「与弥太様は神です。神があなたを使いたいだけ、あなたは動かし

てもらえる。」

早田は、そういうと含むように笑った。

「・・・昔話でもしましょうか。・・・ここは、私が訪れた頃にはまだ村民が住んでいて、立派な神社があっただんです。村民は、与弥太様のことを恐れ敬っていました。私が、来るまではね。」

早田は、嬉しそうに言う。

「民俗学を続けたかったんですが・・・何せ、あなた同様、私は、人間社会に適応できなかったんです。大学まではなんとか出ましたが、小さい工場を転々としながらね、民俗学の調査の真似事なんかやっていたんですよ。あるときね、この土地の奇妙な生贄信仰のことを図書館の古い本で見つけて、惹かれましてね、やって来ました。」

早田は、遠い目をした。

第四話 狩（後書き）

ここまで読んで下さって、ありがとうございます。
続きは、夜蛇神伝説に触れます。早田氏と玉枝が、夜蛇神に選ばれた場面です。よろしく。

第五話 牛頭の夜蛇神（前書き）

残虐表現、官能表現在り。ご注意ください。
昭和初期。夜蛇神を祀っていた村の呪詛が崩壊し、夜蛇神が復活するいきさつのお話です。

第五話 牛頭の夜蛇神

昭和初期、早田のような軟弱な男は罵られる時代でもあった。早田は、ひ弱な体をおして、カメラを片手にこの村へやって来た。

“郷土信仰と思想論”本を執筆したのは、明治の民俗学者、花村勇埜であり、全国の祭りの由来を調べていた。農耕、厄除け・・・花村は、特に厄除けに固執していた。地方には独特の信仰がある。天地災害や、事変は、祟り神の怒りに触れたものであるという考え方は、日本各地に古い風習として根強く残っていた。

この村も、祟り神を恐れ敬う独自の信仰を持っていた。

夜蛇神と呼ばれる御神体は、牛の頭に人型の体を持つが、青黒く黒衣を纏った鬼である。天地異変は無論、人の脳まで惑わす力を持つ神である。崇め奉れば、財を成し、豊饒の大地を与えてくれる。一度怒らせると、人肉を喰らう魔人と化す。と、深く信じられていた。

牛は豊饒の土壌を現し、黒衣の帯は蛇をしめ縄のように組んだものであり、財力と真贋を現す。日を嫌い夜現れるという、実在の神なのだ。

花村の記述の中で、村人の中に夜蛇神を見るものがある。神主と財や豊饒を望む男が願をかけるときに、稀に見るといふ。岩室の暗闇の中におり、口は利かぬが、妙力を使う様は見えるという。夜蛇神を見たものだけが、望みが叶うと言われている。

怒らせなければ、これほどの神を村の外には出せない。村を揚げの重要な神事は、村だけの隠匿しぬいた秘密でもある。

夜蛇神に会えるのは村の男で、祭り、沈め、奉っていた。

土地は栄え、潤い、村人は仲が良かった。

夜蛇神様に願えば、どんな望みも不可能ではない。

望みを叶えるには、相応の貢物を要した。貢物は、生き餌と決ま

っていた。魚でも獣でも良く、その貢物が、祈願者の宝物であるほ
どに、その祈願の成功は約束される。

本を読んで、早田は、望みを適えてもらおうと、考えた。

早田には、人間の友達がおらず、唯一の仲間は、母親だった。そ
の母親も、死期を目前にしていたのだ。強い人間に生まれ変わりたい。
死を望まなくてもいい生き方が出来るように。

早田は、しかし、心の底では、この信仰を信じていなかった。
もし、本当だったら、母を生贄にしてみよう……。

早田が、この村に来たとき、余所者の到来を拒む村人は、早田を
無視した。全く話しが聞けぬ状態だった。もともと、人に好かれる
タイプではない。早田は、村人の冷たい態度にも、攻めが加わらな
いことで親近感さえ覚えていた。

すべてに怖気づいて逃げてばかりいた早田にとって、ここは東京
から遠く離れた四国の地の辺鄙な場所であり、人嫌いであり、出不
精の早田が、一人で行こうと言う気になったことも、そしてここに
居ることも不思議なことであるが、それに気付きもしていなかった。
早田は、一人で村の周囲を歩き回り、いつしか神社の裏山に彷徨
い込んでいた。

案の定、村人たちの冷たい視線の中で、怯みもせずに、社周囲を
うろついていた。

後で考えると、与弥太に呼ばれていたと、わかるが。このときは、
何も考えていなかった。

社の表は豪奢な造りだが、奥は岩山にはまり込むように消えてい
る。早田は、社の周囲を回っていた。

本に記載されている祭りの時期は不正確であり、早田がやって来
たのは、祭りの終わった後であった。やはり、間が悪かったのだと、
落ち込んでいた。

宿もなく、僅かな金は帰りの汽車賃程度では、どうにも動けぬ。

早田は、うら寂しい山郷で、こんな景色のいい場所でひっそりと
死ぬのがいいな。と、いつものような死への回想をしていた。

社の脇には清流が流れている。

早田は、社に数人の村の男たちが寄っているのを、ただ、じつと覗き込んでいた。田畑を耕しながら、早田を睨んでいた女もいる。史書によれば、祭りの終わった後も、神社に集まるのだ。

村人は、いつ、願い、いつ成就されるのかと、ぼんやり思いながら、覗いていた。

広い座敷に7・8人の比較的若い男たちが寄っていた。

そういえば、夕刻の村には女の姿しか見えなかった。男たちはここに集まっていたのか。

社の奥から、玉のように美しい、若い少女が、老いた男たちの手で連れて来られた。少女は、虚ろな目をしてゆらゆらと意思がないように立っているのだ。老人が2人で両脇から大事そうに支えていた。若い男たちは、奇妙な目で、少女を見ていた。

若い男が一人暴れ出し、仲間がそれを抑える。

「太一、玉枝は贄じゃ。あきらめえ。」

太一は泣いている。

老いた男たちの顔には笑みが広がっている。

老いた男たちが、鳴り物を奏で始めた。三味線、太鼓、笛……神楽に似たその音色が始まると、若い男たちが、いつせいに少女に群がって鬨りはじめた。少女の悲鳴が轟く程に、老いた男たちは鳴り物をじゃんじゃんと弾くテンポを速める。

早田は、持っていたカメラで、夢中でシャッターを切った。

少女を助けようという気持ちは微塵もなく、早田は、スクープをとった記者のような興奮状態になり、シャッターを切り続けた。

男たちは、若い男の次は老いた男たちで、少女を鬨り続けていた。朝、夜が明ける頃に、若い男達が先に、太一を引きずるようにして、老いた男たちが最後に、満足顔でそろそろと社から出て行った。神主の装束を身に纏った男が、死んだのか、気を失ったのか、ぐったりしている裸身の少女を抱きかかえて、社の奥へ運ぶ。早田は、夢中でついに行った。清流に沿って社の奥に進めば、小さな扉があ

った。鍵はかかっていない。早田は、忍び込んだ。

少女を運んだ神主の姿はなく、岩室に置かれた木の台に、白い絹が掛けられて、その上に、先程の少女が横たわっていた。早田は、少女の傍に寄り、周囲をキョロキョロと見回した。何も飾られていない祭壇に、無数の蠟燭の火が揺れていた。社側には、鉄格子になつてゐる。ものものしい警戒の割には、社の裏口に鍵がない。

早田は、少女にそつと屈み込んだ。微かな息がある。

早田は、手拭を清流で濡らし、少女の裸体につけられた痣に当て、涙や精液に塗れた体を丁寧な拭きながら、泣いていた。

これが生贄の儀式なのか？

ただの強姦ではないか。

祟り神に捧げる生贄に、この子を出した親や兄弟は、惨い村人の仕打ちを知っているのだろうか。泣いていた太一という男はこの娘の恋人だろう。仲間が太一に先頭を切らせていた。だが、容赦なくその後で太一を含め気がふれたように全員が何度も少女を蹴った。少女は憑かれたように狂乱していた。

こんなに美しい娘を・・・

早田は、玉枝の裸身に無数についた痣に唇を当てた。女の裸身なぞ抱いたこともないし、触れたこともない。早田は、神々しいものを扱うように、癒そうとし、愛撫した。

早田の胸の内には、昨夜撮った写真で、この村の風習を世間に暴露してやるという計画が湧いていた。

早田が、何度か清流との間を往復して、こつそりと少女を介抱している、少女が息を吹き返した。

怯えた目で、早田を見た少女は、目を見開いて、早田を凝視した。「あなたが、与弥太様なのですか？」

「・・・ちがいます。」

少女のあまりの可憐さに、早田は息を呑みながら、首を横に振った。

「では、何故、ここに？あなたは誰？」

玉枝は、あどけなさを含む少女の声で聞いた。

「わ、私は、早田という者です。祭りについて調べにこの村に来ました。・・・どうして、あなたはあんな目に？」

少女は、早田の目をじつと見て、大きな瞳を恐怖に満ちたように見開いて震えた。

「ああ・・・私は、何てことを・・・出て行ってください。私は、死ななければならなかったのです。・・・ああ・・・私が、村に災いを齎せてしまった・・・何て恐ろしい・・・」

すすり泣く少女に、早田は、動揺した。

「・・・どういことなのですか？」

「言えませんが・・・もう、終わりです。・・・あなたは、何て酷い・・・」

少女は、泣きじゃくるばかりで、早田は、困惑しながら少女をただ、黙って見下ろしていた。

「誰だ？何者だ？」

檻の向こうから、男たちの野太い声が響き、

「いかん・・・聖域が穢された・・・」

「神殿に、男が入っちゃう。」

「何を？や、夜蛇神さまじゃないか？」

野太い男の声が怯えたように震えた後、足音が遠ざかって行った。に、逃げよう。あんたを、助ける。」

早田は、裸体の少女に、台の上の白い絹布を巻き、少女を背負った。早田の脆い筋肉は、少女の体重にヨロヨロとし、それでも、早田は必死で、少女を背負って、清流に降りた。

早田のふらついた足はもたもたとし、少女が、早田の背で暴れるため、早田は清流の石々に足をとられて転んだ。

川に飛び降りた村の男たちが、早田を見つけた。

「いたぞーっ こっちだ。」

「おまん・・・昨日うるついとった衆じゃのお？何しゆうがや？」

男たちが、早田に飛び掛った。凄まじい力で捻じ伏せられる。

「捕まえたぜよ。」

早田は半分意識を失っていた。目は見えないが、声だけが聞こえる。

「玉枝は、ここじゃ。生きちゅう。」

「ええーい、仕切り直しぜよ。男衆い集めにやあ・・・太一、触れだせえ・・・」

「お、お父ん・・・、た、玉枝は、俺に返してくれ・・・こがんなつしもたのんも、与弥太様が玉枝を拒んだせいじゃ。べ、別の・・・」

「やつかあしい。太一、おまん、村長の倅ぞ。おまんが惚れたおなごじゃけえ、玉枝じゃなきやいかんがぜえ。村ん衆前で、絶対に口にすなあ。」

「お、お父ん・・・お父ん・・・うつうつ・・・」

数人の足音が近付き、早田は何度か体中を蹴られて、意識を失った。

早田が、気付いたのは、男たちの凄まじい悲鳴が聞こえたからだ。重い頭をふりながら、早田が悲鳴のする方を見ると、座敷のようなところに、青黒い肌で牛頭の与弥太がいて、悶死していく男たちが与弥太の周囲に裸で蠢いていた。与弥太が、玉枝に繋がったまま、早田を見た。早田は、与弥太の姿を見た途端、恍惚となった。玉枝は与弥太に揺られながら、歓喜の声をあげ、夢中で与弥太にしがみついていた。早田は、泣きながら、見ていた。

「ようやった。わしを長年閉じ込めおった連中を皆殺しにしてやつたわ。褒美じゃ、お前を仲間にしてやる。」

早田は、与弥太にひれ伏した。

志乃が、妖艶な目で早田を見た。

神社で村の男連中が、全員一夜で死んでしまったことで、村の女子供はパニックになった。事情を調べに、禁断とされている神社へ恐る恐る足を踏み入れた女を、与弥太は喜んで喰った。

与弥太の傍らには、志乃がおり、早田は、志乃によって、血の味を覚えた。悶死した男、神社に足を踏み込んだ女を、与弥太と志乃と早田は、何年も何年もかけて、喰い続けた。

玉枝は、与弥太に気に入られ、幾年かのうちに、鬼になった。

早田は、玉枝を組み敷く力を得て、志乃も早田の思いのままになった。すべて、与弥太のお陰だった。

神社へ父親を探しにやって来たヒサエも、適応した。

村は、いつの間にか荒廃していた。

太平洋戦争中に、疎開者がいたが、与弥太を祀る術を受け継いだ者は既に消え去っている。誰も、荒廃した神社の奥に、鬼どもが潜んでいると気付くものはいなかった。知ったとしても、祀る術を知らぬ人間など餌に過ぎぬ。

時々、ヒサエと早田が村に出て、そつと人間を狩ればよい。

村が過疎になるのに、時間はかからなかった。

過疎の村には、人の訪れが途絶える。

平和な時代には文化も栄える。

早田は、街に出て、腕のいい大工を雇って、神社を見事な山荘に作り変えた。植木職人を雇って、庭や竹林を造らせた。

金があれば、何でも買える便利な時代になっていた。

岩本は、早田の話を聞きながら、頷いていた。

「僕は、運良く、適応したようですね。」

「運が良いと、考えているのですか？」

「そつ、思いますね。・・・玉枝さんも、もとは人間だったんですね。」

「今では、忘れておられますよ。ふふふ。私や、ヒサエは、与弥太様に玉枝さんほど気に入られていないというわけです。完全な鬼になれていません。」

早田は、寂しそつに言った。

「そろそろ、食事ですかね・・・」

早田に言われて、岩本は志乃の居る部屋へ入って行った。

志乃は、岩本が狩った男に絡みつき紅い目をしていた。男は、朦朧となりながら、志乃の腰を掻き抱いている。岩本が寝室に入ってきたことさえ気付かず、吠えるような声をあげている。

岩本は、するりとベッドに入り、男の喉に噛み付いた。

甘く温かい液が、男の首から岩本の喉へドロリと流れ込む。

白銀の長い牙から、上顎を伝い喉に直接流れ込んでゆく。鼻で息を吸いながらごくごくりと喉をならせば、首から血潮が岩本の胃袋へ、岩本の胃袋から直接全身が吸収を始めるように、気だるさが消えていく。この前、喰らった柴田と違い、この男の血潮は汚れている。

ああ、こんな獲物しか、仕留められなかったか・・・

岩本は空腹を満たしながら、志乃を見た。

「今度は・・・もっと旨い人間を狩って来るよ・・・志乃さん・・・」

「

男の断末魔の喘ぎを耳にしながら、岩本は志乃に囁いた。

「・・・もっと美味しい人間が・・・？うふふ。うふふ。」

志乃が男の下腹部に跨ったまま、腰を振るたびに、男は、干からびた喉から、掠れた息を漏らした。志乃の髪はさらさらと神々しく揺らぎ、真っ白く透き通る肌はぼっと仄かに輝く。

「ああ・・・綺麗だ。志乃・・・」

岩本は、志乃と繋がり髪に顔を埋める。

まだだ・・・俺は、まだ・・・志乃に吸われる・・・

志乃と繋がれば、岩本の体から精気が志乃に向かって流れて行き、岩本は力が萎えそうになる。岩本は、干からびながらまだ息のある男の左胸、脇腹、腕にかぶりつき血を啜る。

志乃が、腰を振って岩本にしがみつく。意識を失いかける岩本の口に、温かい志乃の血がトロリと流れ込んでくる。

「ああ・・・志乃・・・僕は・・・」

「すぐる様・・・すぐに、鬼にはなれません。大丈夫、わたしの血をお飲みくださいな。」

意識を遠のくのを感じながら、岩本はぐっすりと眠った。

第五話 牛頭の夜蛇神（後書き）

続きは、更なる美食を求めて、岩本氏が狩りに出ます。

第六話 鬼の復活（前書き）

誘拐シーン、残虐表現、官能表現在り。ご注意ください。
岩本氏の持ち帰るご馳走で、夜蛇神が人の姿に戻ります。

第六話 鬼の復活

岩本は、神戸の市街地をぶらぶらと歩いていた。

早田から、餌は都心で狩るように言われている。人間の多いところの方が、化け物は紛れ込めるのだ。

岩本の頭の中には、牛頭の与弥太と志乃の姿がある。

鬼の力が、欲しかった。

東京は、遠すぎる・・・神戸にも、餌はたくさんいるのだ。

岩本は眠りすぎた。飢えを感じてから目が覚めたのだ。

すぐに、狩れると、志乃に証明して見せたかった。

公園から、人間たちの話し声が聞こえた。喚き声に混じる泣き声。

岩本の目が、自動販売機の傍に屯っている少年達を捉えた。

私服を着た少年に、学生服の少年達が3人で群がっている。私服の少年は青白い顔をして、俯いていたまま、涙と鼻血でどろどろにした拳を突き出している。

「そうそう、大人しく、貸してくれたら良かったんだよ。里村君。」

里村君から受け取った紙幣を広げて、学生服の男の子の回し蹴りが私服の少年の頬に当たった。

「冗談？」

「うっそ？千円？冗談でしょ？」

こんな光景をよく覚えている。岩本は、里村の立場にいたのだ。

憎かったなあ・・・力があれば、殴り殺したかったよ。なあ、里村君。

岩本は、唇の端を吊り上げた。

深刻な顔をして、自動販売機に岩本は近付いた。大人の登場に、少年達は敵意まるだしの視線を向け、私服の少年を背後にこっそりと隠した。

岩本は、笑いを堪えながら、一番強そうな少年の目に厳しい目を向けた。

「なんだよお？おっさん」

「弱いもの虐めはいけないよ。君達。」

「はあ？」

岩本は笑いを必死で堪えた。

「お金が、欲しいのかい？」

少年達の顔に、いろんな表情が浮かぶ。

「な、なんだよ？おっさんが、俺達に金でもくれんのかい？」

「ああ、あげるとも。」

岩本は、財布を取り出して、6万円を抜いた。財布を少年達が覗き込む。岩本は6万円を少年達の鼻先に突き出した。

「だからさ、その子は放してあげなよ。」

少年達は、喜びいっぱい顔に浮かべて6万円をひったくった。

「おい、里村、このこと、絶対誰にも言うなよ。」

里村は、踵を返して逃げ出した。

「さて、君達。もっと、お金が欲しくない？」

「何だよ？おっさん、何者だよ？」

岩本は、懐から名刺を取り出した。「JJプロダクション 人材

開発部長 岩本すぐる。」

「JJプロダクション？」

「知らないかもしれないけど、モデル、俳優の派遣業しているんだ。」

少年達は怪訝な顔をするが、岩本の傍から離れようとし無い。

「君達、さっきの蹴りは良かったよ。いや、ごめん、見せてもらってた。」

少年達は、蹴りを入れた少年を羨ましそうに見ていた。

「君達、いくつ？高校生？いい体してるね。うん、顔もいいよ。モテるだろ？君。」

「まー、そんなとこだけど、俺達、停学中。親にバレねーよーに、ガッコ行くフリしてるだけってとこ。」

蹴りを入れていた少年が、ウキウキと言う。

「じゃ、内緒でバイトできる？」

「バイト？」

蹴りを入れた少年を羨望の眼差しで見ている。

「実は、ちよつとした配役なんだけど、3人、探してるんだよね。」

「えっ？3人？」

少年達は顔を見合わせた。

「うん。…停学中にバイトって、マズイよね？」

「あ、いや、俺ら、全然、誰にも言わねーし。」

「そうかい？…ま、1日だけのエキストラだけだね。」

「ど、どんなドラマなんスか？」

岩本は、困った顔をして、少年達に顔を近づけた。

「AV男優…。君たち、経験あるよね？」

少年達の顔が変わる。喰いついた。岩本は笑いを堪えた。

「そ、それと、蹴りって、な、何の関係が？」

「ま、ちよつとしたレイプシーンも入れようかなってとこでさ。」

少年達が唾を飲み込む音が、聞こえた。

「でも、ま、男は顔は出ないし、バイト代も、1人10万くらいな

んだけどね。…やっぱ、無理だよな？いきなりだしね？」

「…俺、やりますよ。」

蹴りを入れていた少年が言う。

「お、俺も。」

「あ、俺もやります。」

「じゃ、明日、朝、5時だけど、この公園に来れる？」

「朝5時ですか？」

「うん。ロケ地が、高知なんだ。」

「高知って、あの高知県？」

「うん。1泊してもらっていいよ。旅館まるごと借りてるから。」

少年たちが少し躊躇する。

「あ、いいよ。無理だったら。他の子探すかな…。ええと…。」

「

岩本が忙しそうにキョロキョロと周囲を通る若い男に目を走らせながら、素っ気無く言つと、蹴りを入れていた少年が意気込む。

「大丈夫ですよ。俺、明日5時。ここに來ます。」

「そう？16歳以上だよね？」

「あ、大丈夫ツス、俺ら、17だから。」

「17か…本当にいいのかな？」

「絶対、大丈夫。俺ら、実際より老けて見えるから。」

「じゃ、明日。ここでね。」

「はいっ。」

「あ、準備金、あげるよ。」

岩本は1枚ずつ万札を渡した。少年達の顔が輝く。

岩本は、そそくさと、その場を立ち去った。

里村という少年を帰した後に失踪はまずい。

翌日の5時半に岩本は、同じ場所に立っていた。

果たして、少年達が3人とも別々に現れた。岩本の唇の端がきゅうつと釣りあがった。

「おはよう。」

「おはようございまっす。」

「ちゃんと、両親に言ってきた？」

あ…という顔をして3人が顔を見合わせた。
言つてない。

岩本は笑いを堪えた。

「あ、言えないよね。ごめんごめん。さ、行こうか。」

公園には、運転手が迎えに来ていた。

「さ、乗りなさい。」

少年達はウキウキと遠足気分で車に乗り込んだ。

「いらつしゃいませ。お待ちしております。」

四奏館で出迎えに出たのは、志乃だった。玉枝もヒサエもいて、

ぴちぴちとした獲物に、目を輝かせている。

「まあ。どうぞどうぞ、おあがりくださいな。」

「いやあ、女将さん、美人だねー。」

少年達の理性の箍は既に掻き消えている。

豪華な部屋に見事な膳、とりりとした泉質と、早田に聞かされる女性への性技の話題に、少年達はバイトのこともウキウキと、有頂天になっていた。

少年はそれぞれ別の部屋をあてがわれた。

志乃、玉枝、真弓が少女に変容して、少年達の部屋へ行った。

岩本は、与弥太の幻惑の力をニヤニヤしながら見ていた。今時の女子高生に見事に志乃も玉枝も変じているし、真弓は清楚なイメージではなく、志乃たち同様、少し擦れた女の子に変じている。3人とも驚くような美少女であり、はちきれするような肉体になっている。少年は、初めての酒の宴に酔い潰れて眠っていた。

半裸でベッドに現れた少女に、夢中になってしがみついた。

3人の少年は、山荘奥の岩室に連れて来られていた。

そこには、数段艶やかになった真弓がいて、岩本と早田に微笑みかけた。与弥太が、現れた。

少年たちは、朦朧とした顔で、突っ立っていた。

ガブリと、少年の喉に、与弥太は噛み付いた。

少年はビクビクと体を震わせている。

「嗚呼……」

志乃が少年の下腹部に跨ったまま、白い喉を仰け反らせた。岩本は、少年の首筋に鋭い牙を突き立てた。

「うああああ……」

少年が弱弱しくもがき、断末魔の雄叫びをあげている。

「うまい……うまいいい……」

岩本は少年の首に吸い付いて貪るように吸った。

飢えていた五臓六腑に、生暖かい新鮮な血潮が満ちてゆく。

幾晩吸い尽くしただろうか。

最後に生き延びた少年は、やはり、里村君に蹴りを入れた少年だった。少年の最期には真弓が少年を吸い尽くした。

「げげふっ」

大きなげっぷをして、岩本が口の端から赤黒くなつた血を滴らせた。

与弥太が、

「すぐる」

地の底から響くような不気味な低い声で、岩本を呼んだ。手招きされて、岩本は、与弥太の足元に膝間付いた。他の者たちは、下がった。岩本は、岩室の中で、与弥太の足元に与弥太を前に座っていた。どれくらいの時間が経過したのか、岩本は、ぼんやりと与弥太の前に座っている腰を、ゆっくりと伸ばした。

力がむくむくと湧きあがり、岩本はうんと背伸びをした。

しなやかな青年のような肢体と、身軽さと、力を感じる。

与弥太が指し示した水盆に写る岩本には、志乃や真弓のような禍々しいほど美しい容貌が写る。岩本は自分に授かった顔を髪を撫でてみる・・・岩本は、与弥太を見た。

与弥太は、両手を頭に置き、角を持って頭を揺する。

牛頭がとれ、今の岩本に似た、麗しい男が、そこにスラリと立った。

人間か・・・

岩本が、驚いて見ていると、与弥太は首をグキグキと回し、牛頭を岩本に被せた。岩本の肌が青黒く変わり、体躯が大きくなった。

与弥太が、岩本の頭から、牛頭を外すと、もとの美貌に戻る。

「僕も、鬼になれたのでしょうか？」

「うん。存分に、暴れよう。私も、外に出てみたい。」

「あなたが移動できるならば、いつそ、東京に行きませんか？」

「良い餌場のようなお。」

「多分、餌だけではなく、僕のような人間もいますよ。」

「ほほお。仲間を、増やそうではないか。すぐる。お前のような者に、会いたい。」

与弥太は美しい顔で岩本に微笑む。

「いくらでも、います。」

与弥太は、飛び跳ねる。

「日の光は、嫌いだ。」

岩本は笑う。

「東京は、眠らない街です。夜の狩には適していますよ。」

与弥太は、嬉しそうに笑う。

「先ほどの少年の味は、実に見事だった。私に、ほれ、この通り力を与えおったわ。ふはははは。」

「お役に立てて光栄です。」

「志乃も、玉枝も、真弓も連れて行こう。早田と、ヒサエもだ。」

「畏まりました。」

「すぐる様は、本物の鬼になってございます。おめでとうございます。」

志乃、玉枝、真弓、ヒサエが、うつとりとした目で岩本を見た。

岩本は、満足そうに微笑み、早田と与弥太と顔を見合わせた。

与弥太の、人の姿を初めて見た者たちは、与弥太に心酔した。

第六話 鬼の復活（後書き）

ここまで読んで下さいましてありがとうございます。

次は、鬼が山奥の地を離れていよいよ都心に進出します。

助けた形になった里村くんが、岩本氏の仇になって行きます。鬼はいつまで好き勝手に暴れられるでしょうか。

請うご期待！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2462b/>

夜蛇神伝説

2010年10月9日01時33分発行